宮城県文化財調査報告書第205集

桃　生　城　跡
細　谷　B　遺　跡

――三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅴ――

平 成 18 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
国土交通省東北地方整備局

桃生城跡北辺SD02溝跡（西から）

桃生城跡調査区全景（西から）

細谷B遺跡SI02竪穴住居跡（南から）

序

宮城県北東部を縦貫する三陸縦貫自動車道は、現在河北インターチェンジまでの区間が開通し、さらに北に向かって工事が進められています。

この三陸縦貫自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化財が埋蔵されている遺跡があります。埋蔵文化財は、わたしたちの郷土の歴史と文化を根底から支える歴史遺産のひとつであると同時に、将来における文化向上の礎の一部をなすものです。宮城県教育委員会では、これらの遺跡を保護するために、関係機関と協議を積み重ねた結果、路線の一部変更も含め、万全を期してまいりました。

本報告書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との保存協議に基づき、三陸縦貫自動車道の建設に先立って実施した桃生郡河北町（現石巻市）桃生城跡・同郡桃生町（現石巻市）細谷Ｂ遺跡に関する発掘調査報告書です。双方の遺跡の調査を通して、この地域の歴史を解明していく上でも貴重な成果を得ることができました。今後、この報告書を多くの方々に活用していただければ幸いに存じます。

さいごに、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成18年３月

宮城県教育委員会
教育長　白　石　　晃

例　　言

1．本書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との協議に基づき実施した、三陸縦貫自動車道矢本石巻道路建設に伴う桃生城跡・細谷Ｂ遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．発掘調査および資料整理・報告書の作成に際しては、以下の方々および機関からご指導・ご助言、ご協力を賜った（所属機関名は当時の名称・敬称略）。

石本　弘（福島県文化センター）　稲野裕介（北上市教育委員会）井上雅隆（滝沢村教育委員会）日下和寿（岩手県教育委員会）　熊谷公男（東北学院大学）　車田　敦（田尻町教育委員会）　佐藤敏幸（矢本町教育委員会）　菅原祥夫（福島県文化センター）　高橋誠明（古川市教育委員会）辻　秀人（東北学院大学）　中野裕平（河南町教育委員会）　西野　修（矢巾町教育委員会）　芳賀英実（石巻市教育委員会）　亀山暢幸（郷土史家）

秋田県埋蔵文化財センター　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　東北歴史博物館　水沢市教育委員会　宮城県多賀城跡調査研究所　桃生郡河北地区教育委員会　桃生町教育委員会

4．本書の第１図（3頁）は国土交通省国土地理院発行の「登米」「飯野川」（1/25,000）の地形図を複製して使用した。

5．測量原点の座標値は、日本測地系（改正前）に基づく平面直角座標第Ｘ系による。なお、方位は座標北を表している。

6．本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。遺構番号は、遺構の種別に関わらず、調査の際に付した通し番号を用いている。

ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＡ：柱列跡　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝跡　ＳＫ：土壙

ＳＸ：土塁・竪穴状遺構・遺物包含層・その他

7．遺構平面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構全体図：1/400　竪穴住居跡：1/60　土塁：1/200　掘立柱建物跡：1/100

8．土色の記載にあたっては、『新版　標準土色帖　1994年度版』（小山・竹原 1994）を使用した。

9．本文中に使用した「灰白色火山灰」は、現在、10世紀前葉ころに降下したものと考えられている（白鳥 1980、町田・新井 2003、尾口 2003）。

10．遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下のとおりである。

土器類：1/3　金属製品：1/2　石器・石製品：1/2

11．遺物実測図では、以下の場合にはスクリーン・トーンによって示した。

土師器黒色処理　土器炭化物付着

12．本書の執筆・編集は、調査担当者との協議の後に相原淳一が行った。

13．本遺跡の調査成果については、その内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。

14．発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

巻頭写真
序
例言
目次
はじめに …… 1
遺跡の概要 …… 2
桃生城跡 …… 5
細谷Ｂ遺跡 ……37
引用・参考文献 ……95
報告書抄録

はじめに

仙台市から岩手県宮古市に至る自動車専用道路が、三陸縦貫自動車道として立案・計画され、そのうち「矢本石巻道路」については平成８年度から工事に着手する事業計画が決定された。この「矢本石巻道路」は、石巻河南インターチェンジを起点に旧北上川を渡り、桃生インターチェンジ（仮称）にいたるものである。事業計画では、幅23.5ｍの４車線を整備するにあたり、地形の起伏に沿って大規模な切土や盛土を行うものであった。こうした経緯を受けて、宮城県教育委員会と国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所は遺跡保存のための協議を行ってきた。その結果、遺跡への影響を避けるために一部区間についてはルートの変更を行う一方で、分布調査を行い、新たな遺跡の有無を確認するとともに、周知の遺跡については確認調査を行い、これらの結果に基づいて再協議を重ね、遺跡の保存と道路整備事業との調整を図ってきた。

こうした中で、平成12年度から予定路線内の遺跡の発掘調査に順次着手した。平成12年度は桃生郡河北町（現石巻市）沢田山西遺跡・新田東（しんでんひがし）遺跡の確認調査を実施し、平成13年度には両遺跡の事前調査を行った。平成14・15年度には、沢田山西遺跡・桃生郡桃生町（現石巻市）角山（かどやま）遺跡の事前調査を行い、およびこれと並行して桃生城跡・万歳山（まんざいやま）Ｃ遺跡・太田窯跡・細谷Ｂ遺跡などの確認調査を進めた。本報告書に掲載する桃生城跡・細谷Ｂ遺跡の事前調査は平成15年度に実施している。平成16・17年度に未買収地のために調査できなかった角山遺跡の一部の事前調査を終え、そして本年度に山居遺跡・太田窯跡の事前調査を行っている。

なお、本年度で石巻市分の事前調査はすべて終了し、並行して「桃生登米道路」建設関連の協議と調査も一部実施されている。

第１表　三陸縦貫自動車道建設計画に伴う発掘調査

調査年度	遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	調査期間	報告書
平成13（2001）	沢田山西遺跡	河北町	2,080	4.09～4.20　10.01～10.13	宮城県教育委員会 2002
	新田東遺跡	河北町	8,500	4.23～12.10	宮城県教育委員会 2003
平成14（2002）	角山遺跡	桃生町	2,900	4.08～6.17　10.15～12.10	宮城県教育委員会 2005
	崎山Ｂ遺跡	河北町	6,000	6.03～7.23	宮城県教育委員会 2004
	沢田山西遺跡	河北町	1,000	6.03～10.22	宮城県教育委員会 2004
平成15（2003）	万歳山Ｃ遺跡	河北町	700	4.07～5.16	宮城県教育委員会 2004
	桃生城跡	**河北町**	**1,500**	**4.30～6.06**	**（本報告書）**
	沢田山西遺跡	河北町	1,200	5.18～7.18	宮城県教育委員会 2004
	太田窯跡	桃生町	2,000	6.17～8.01	
	角山遺跡	桃生町	7,400	7.02～12.02	宮城県教育委員会 2005
	八幡遺跡	桃生町	2,540	7.17～8.07　9.01～10.08	宮城県教育委員会 2004
	細谷Ｂ遺跡	**桃生町**	**900**	**11.12～12.11**	**（本報告書）**
平成16（2004）	角山遺跡	桃生町	95	8.02～8.03	宮城県教育委員会 2005
平成17（2005）	角山遺跡	石巻市	1,400	4.23～5.11	
	太田窯跡	石巻市	2,900	5.09～6.13　10.12～11.30	

（河北町・桃生町は現石巻市）

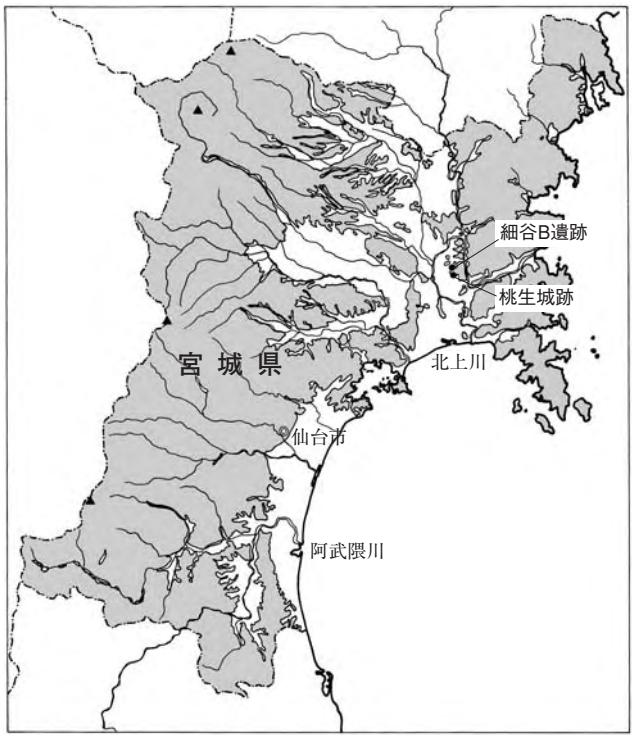
宮城県教育委員会　2002『沢田山西遺跡－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ－』宮城県文化財調査報告書第189集
2003『新田東遺跡－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ－』宮城県文化財調査報告書第191集
2004『沢田山西遺跡ほか－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅲ－』宮城県文化財調査報告書第196集
2005『角山遺跡－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅳ－』宮城県文化財調査報告書第200集

遺跡の概要

１．遺跡の位置と地理的環境（第１図）

桃生城跡・細谷Ｂ遺跡は宮城県石巻市に所在する。石巻市は宮城県の北東部に位置し、地形的には北上川下流域の石巻平野に属する沖積地と北上山地の南端にあたる丘陵地帯からなっている。

このうち、桃生城跡は東西3.5km、南北４kmの北上川によって分断される独立丘陵の南側に立地する。遺跡の周辺では、比較的急峻な丘陵部と沖積層が厚く堆積した平野部が直に接しており、河岸段丘面はほとんど発達していない。細谷Ｂ遺跡は桃生城跡の北側、約1.5kmの石巻市桃生町太田字細谷に所在する。遺跡は桃生城跡の所在する独立丘陵の西側、丘陵裾部に立地する。



第１図　遺跡の位置

２．周辺の遺跡（第２図）

今回、調査した桃生城跡・細谷Ｂ遺跡の周辺には、多くの遺跡が分布している。最も古い時代の遺跡は、縄文海進期にあたる縄文時代早期後葉の樫崎貝塚（20）・十所（とどころ）貝塚（15）・長根浦貝塚（45）などである。特に、昭和26・28年に発掘調査が行われた樫崎貝塚では、縄文早期でシジミ（主）・カキ・ハマグリ、前期でハマグリ･カキ、中期でカキ・ハマグリ層が確認されるとともに、土器や石器、骨角器などの人工遺物、屈葬人骨が発見されている。なお、この地域の丘陵は中生代三畳紀～新生代第三紀に形成された基盤層群からなり、火山灰堆積層は発達せず、多くは基盤岩の上に薄い腐植土や基盤風化土、崖錐性の基盤崩落土をのせるのみで、旧石器時代の遺跡は確認されていない。

このほか、縄文時代の貝塚や遺跡として、深山（しんざん）貝塚（10）、山居遺跡（30）ほかが知られている。正規の調査は行われていないものの、深山貝塚ではヤマトシジミ（主）・アサリ・カキとともに、縄文時代中・後・晩期（主）の多数の人工遺物が得られており、この地域では遅くとも縄文時代晩期までには淡水化したものと考えられる。

弥生時代の様相は明確ではない。弥生時代中期以降の土器片が桃生城跡（１）や新田東遺跡（２）、角山遺跡（６）で得られているのみである。

古墳時代の遺跡としては、新田東遺跡や角山遺跡、袖沢古墳群（９）ほかがある。新田東遺跡では、前期の竪穴住居跡１軒、角山遺跡では後期の集落跡が発見されている。袖沢古墳群では、埴輪を伴う中期古墳が調査されている。

古代では、著名な桃生城跡（１）をはじめとし、多くの遺跡が確認されている。今回、調査するこ

（1：50,000）

番号	遺跡名	時　　代	番号	遺跡名	時　　代	番号	遺跡名	時　　代
1	桃生城跡	縄文早･後･弥生･古墳･古代･近世以降	16	沢山城跡	中世	31	太田館跡	中世
2	新田東遺跡	縄文早～前･弥生後･古墳･古代･近世以降	17	壇ノ森館跡	中世	32	万歳山Ｂ遺跡	古代
3	細谷Ｂ遺跡	縄文前～後・古代・中近世以降	18	黄竜渕館跡	中世	33	万歳山Ａ遺跡	縄文
4	宗全山遺跡	縄文・古代	19	陣ヶ峰館跡	中世	34	問答山遺跡	古代
5	太田窯跡	古代	20	樫崎貝塚	縄文早・前･中	35	赤間館跡	中世
6	角山遺跡	縄文早･弥生･古墳･古代･中世･近世	21	樫崎館跡	中世	36	神取山館跡	中世
7	日高見神社遺跡	縄文・古代	22	山田館跡	古代･中世	37	神取御殿山窯跡	近世
8	万歳山Ｃ遺跡	縄文中･後･古代	23	山田囲古墳	古墳	38	高屋敷遺跡	古代
9	袖沢古墳群	古墳	24	中津山城跡	中世･近世	39	飯野館跡	古代・中世
10	深山貝塚	縄文中～晩	25	白鳥古墳	古墳	40	外吉野遺跡	古代
11	倉埣遺跡	縄文晩･古代	26	安倍館跡	中世	41	山崎館跡	中世
12	茶臼山附近遺跡	古代	27	八幡遺跡	縄文・古代･近世	42	館ヶ森館跡	中世
13	如来山館跡	中世	28	十貫壱番遺跡	古代･近世	43	茶臼山館跡	古代・中世
14	永井館跡	中世	29	細谷遺跡	縄文晩・古代	44	柳津館山館跡	古代･中世
15	十所貝塚	縄文早･中･古代	30	山居遺跡	縄文中～晩・古代	45	長根浦貝塚	縄文早･古代

第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡

とになった石巻市飯野字碓畑地区は、桃生城跡の北東部の東に隣接する場所にあたる。『続日本紀』によれば、桃生城跡は天平宝字２年（758）に造営が始まり、翌３年（759）には完成したことや、宝亀５年（774）７月には海道蝦夷によって桃生城の西郭が敗られたことなどが記載されている。桃生城跡の位置は、河北町誌編纂事業における河北町飯野字中山・桃生町太田字沢入畑の通称「長者森」周辺の踏査により、３条に並ぶ土塁状の高まりや焼けた壁材や瓦などが発見され、この地が有力視されるようになった。その後、昭和49年度から平成13年度までの計10次に及ぶ発掘調査が宮城県多賀城跡調査研究所によって実施された。その結果、この地が桃生城跡であることが確定するとともに、桃生城跡が東西約300m、南北約350mの約６万㎡の広大な規模を持ち、北半部は北辺から南に延びる築地塀によって東西に二分されることや、城内の大部分の施設は焼失していることなどが明らかにされている。

同じ独立丘陵上の遺跡として、桃生城跡と土橋状遺構によって結ばれ、桃生城と密接な関連があるとされた新田東遺跡（２）や、角山遺跡（６）などがある。桃生城に瓦を供給したと言われる宗全山遺跡（４）や太田窯跡（５）は今回、報告する細谷Ｂ遺跡（３）の周辺に位置している。桃生郡内筆頭の延喜式内社日高見神社の現在の社殿もこの丘陵上に位置し、境内付近（７）には古代の遺物が散布することで知られている。また、10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰に覆われた水田跡が、角山遺跡や八幡遺跡（27）では、調査されている。

中世では、安倍館跡（26）、太田館跡（31）、永井館跡（14）、壇ノ森館跡（17）、黄竜渕館跡（18）などの多くの城館跡が知られているが、多くは『風土記』関係にその所伝を残すのみで、考古学的な発掘調査は行われておらず、詳細は不明である。

桃生城跡（ものうじょうあと）

目　　次

Ⅰ　調査の方法と経過 …… 7
Ⅱ　発見された遺構と遺物 …… 9
Ⅲ　考察 ……21
Ⅳ　まとめ ……28
写真図版

調　査　要　項

遺 跡 名：桃生城跡（ものうじょうあと）（宮城県遺跡地名表記載番号：66004）
遺跡記号：PG
所 在 地：宮城県石巻市飯野字中山・字確畑（かるすはたけ）（今回の調査区）ほか
調査原因：三陸縦貫自動車道建設
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調査期間・面積：
　確認調査　平成14年（2002）12月19・25日
　対象面積　6,000㎡　　調査面積　1,100㎡
　事前調査　平成15年（2003）４月10日～６月６日
　対象面積　2,500㎡　　調査面積　1,500㎡
調 査 員：確認調査　相原淳一・須田良平・奥山芳明
　事前調査　相原淳一・須田良平・岩見和泰

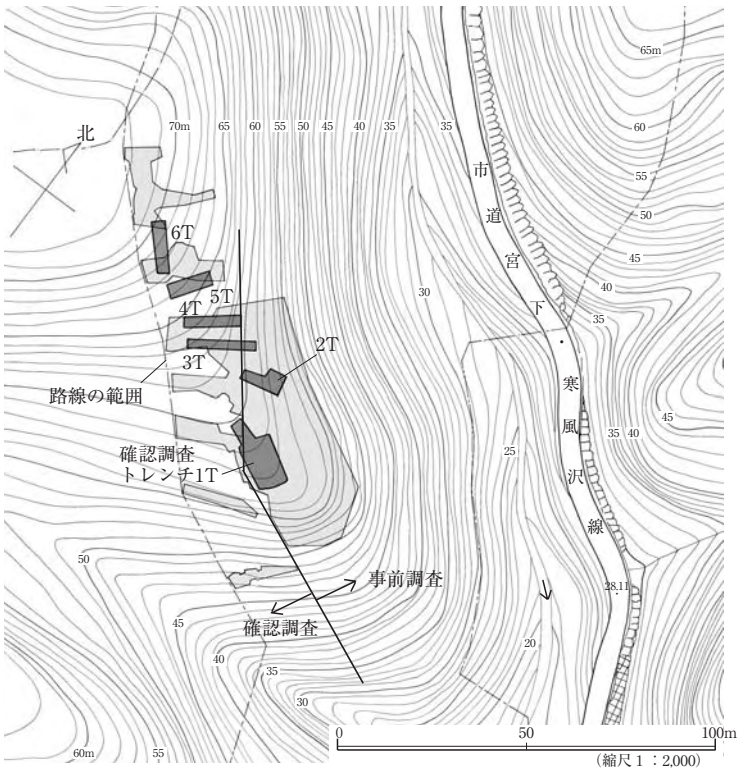
Ⅰ　調査の方法と経過

三陸縦貫自動車道の当初の計画路線は、桃生城跡の内部を南北に縦断するものであった。このため、宮城県教育委員会は遺跡の保存の観点から路線計画の変更を建設省へ要望した。協議の結果、路線は桃生城跡の東外側の隣接地へ変更することになった。

今回の調査区周辺は、桃生城跡の北東部に隣接することから、平成2年に改めて分布調査を実施したが、杉林のために地表面を観察することができず、遺構や遺物の存在を明らかにすることができなかった。平成14年、杉の伐採後に再度、分布調査を実施したところ、小規模ながら平場状に開けた箇所があり、地形的に遺構の存在が予想された。このため、同年12月19日と25日に確認調査を行った。

調査は幅２ｍで、任意の長さのトレンチを６本設定した。

第１図　桃生城跡全体図（宮城県多賀城跡調査研究所 1975～2002をもとに作製）



第２図　調査区の位置

調査の結果、1Tでは竪穴住居跡が確認され、トレンチを拡張して住居跡の輪郭全体を検出するとともに、周囲に遺構がないかどうかを確かめた。2Tでは、灰白色火山灰の堆積する大溝跡が検出された。3T～6Tのトレンチによって、大溝跡の続きを確認した。

写真１　1T竪穴住居跡確認状況（南から）

写真２　2T大溝確認状況（東から）

以上の調査成果を踏まえ、平成15年４月10日～６月６日に発掘調査を実施した。計画された道路は４車線であるが、まず暫定的に２車線分の工事を優先させることから、この暫定2車線分について事前調査、その他については確認調査で対応することとなった。すなわち、調査区Ⅰ～Ⅴ区のうち、調査区Ⅰ区の北東部が事前調査部分で、それ以外のⅠ区南西部・Ⅱ～Ⅳ区は確認調査部分である。

４月10日から24日まで表土除去を行った。丘陵尾根筋を中心とする斜面のために、表土の流出が著しく、確認調査で検出した大溝に関わる部分の周辺でのみ、旧表土や灰白色火山灰層が確認された。表土除去と遺構検出作業に並行して、日本測地系の国家座標による基準点測量を行った。

Ａ１：X＝－162,751.6687　Y＝39,233.9352

Ａ２：X＝－162,739.4727　Y＝39,233.9352

Ｂ１：X＝－162,756.4245　Y＝39,204.4545

Ｂ２：X＝－162,737.0985　Y＝39,204.4545

Ｂ３：X＝－162,726.3865　Y＝39,204.4545

Ｃ１：X＝－162,729.6251　Y＝39,175.8066

Ｃ２：X＝－162,710.1010　Y＝39,175.8066

調査はX＝－162,750.0000、Y＝39,231.0000を任意の基準点（0・0）とし、国家座標上に３m×３mグリッドを設定して行った。基準点から東に３m、６m、・・・の基準線をE-3、E-6、・・・と呼称し、同様に西に３m、６m、・・・の基準線をW-3、W-6、・・・とした。南北についても同様に基準点からS-3、S-6,・・・あるいはN-3、N-6、・・・と呼称した。

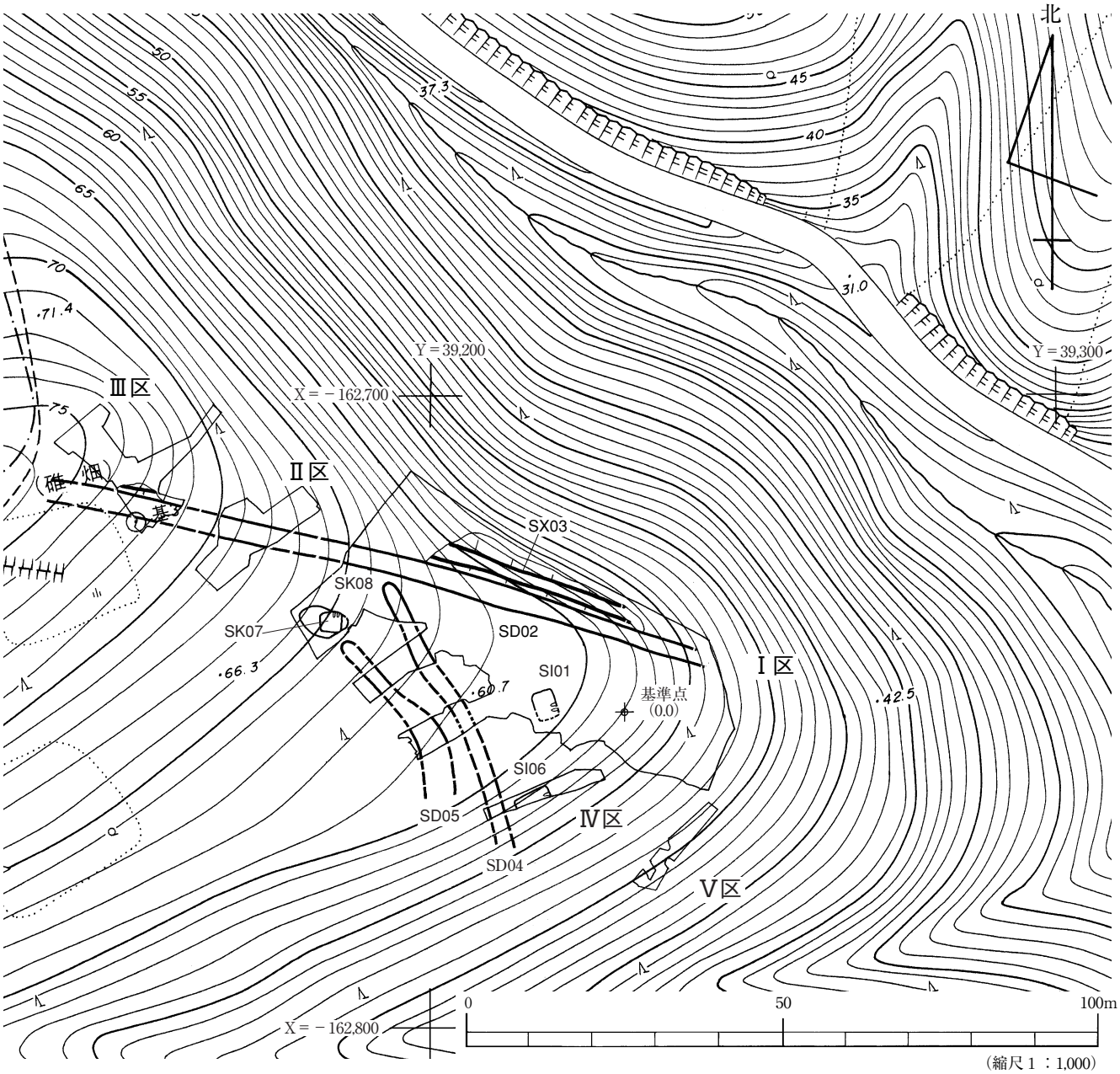
発見された遺構は1/20平面図・断面図、1/100・1/200平面図に記録した。記録写真は、６×７のモノクロ・カラーリバーサル及びデジタルカメラを使用した。遺構精査終了後、６月６日に空中写真（６×７モノクロ・カラーリバーサル、35mmカラーリバーサル、デジタルカメラ）とビデオの撮影を行った。

Ⅱ　発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、溝跡３条（SD02・04・05）、土塁跡１条（SX03）、土壙１基（SK08）、竪穴住居跡3軒（SI01・06・07）である。調査区ごとに記述していく。

１．Ⅰ区

Ⅰ区で発見した遺構には、SI01・SI07竪穴住居跡、SD02・04・05溝跡、SX03土塁跡、SK08土壙がある。このうち事前調査の対象になった遺構は、SI01竪穴住居跡、SD02溝跡、SX03土塁跡である。



第３図　遺構配置図

（1）竪穴住居跡

①【SI01竪穴住居跡】

Ⅰ区のほぼ中央、N－0－S・W－12付近に位置している。住居跡の南側はすでに流出しており、北側のみが残存している。

［平面形・規模］隅丸長方形と見られ、東西4.0m、南北2.5m以上の規模を持つ。

［方向］東辺でN－23°－Wである。

［壁］北壁部分で高さ16cmである。

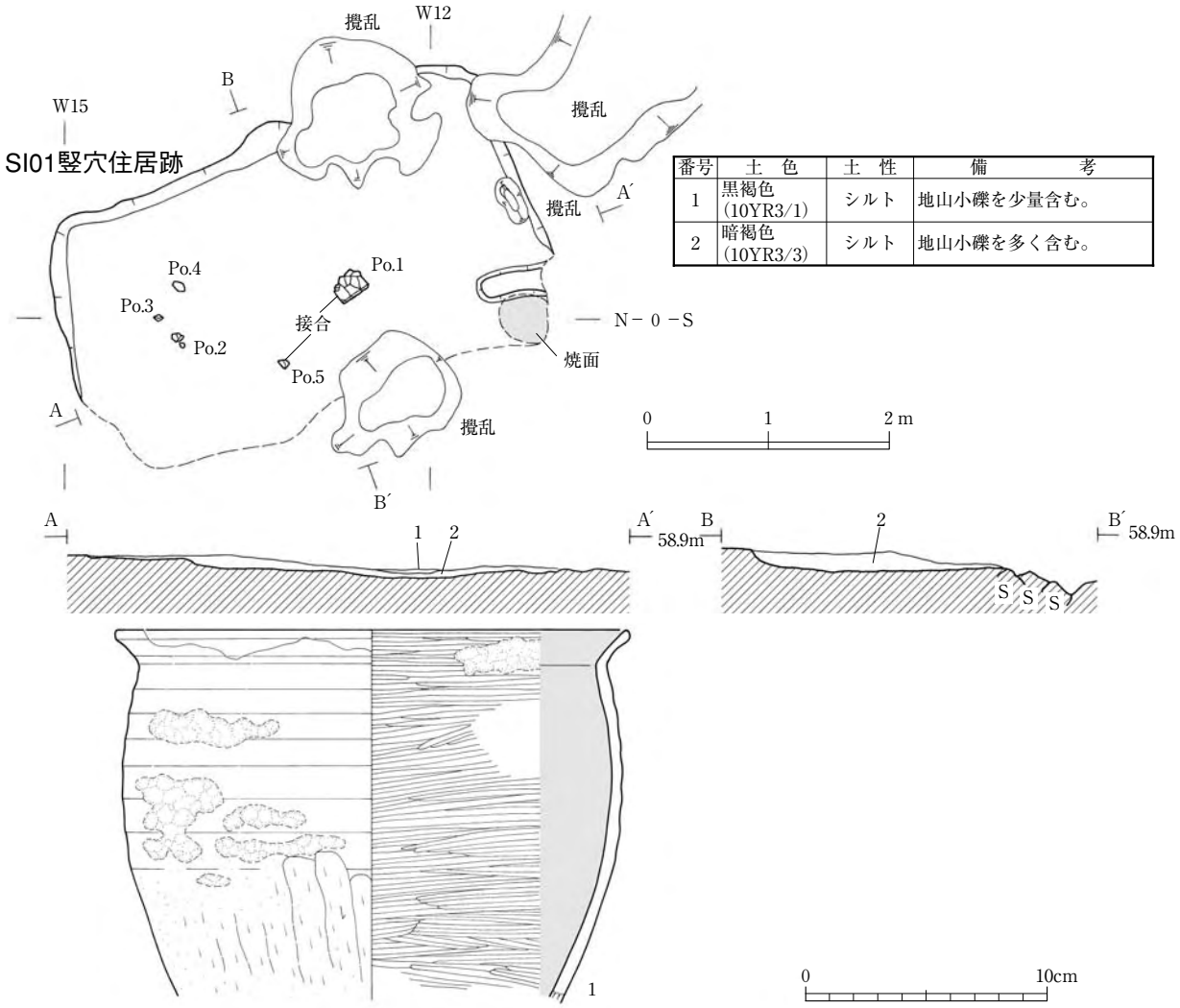
［床面］ほぼ平坦である。地山岩盤を直接床面としている。

［主柱穴・周溝］検出されなかった。

［カマド］東辺に設けられている。残存状況は極めて悪く、左側壁基底部と燃焼部底面の焼面を残すのみである。

［堆積土］２層認められた。黒褐色シルト（１層）・暗褐色シルト（２層）の自然堆積である。

［出土遺物］堆積層中から土師器の甕小片４点、床面から土師器甕１点(1)、土師器甕底部片１点、土師器甕体部小片３点が出土している。床面の土師器甕はやや広口で鉢状をなし、ロクロ調整の後に体下部を手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。



番号	土　色	土　性	備　　考
1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山小礫を少量含む。
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小礫を多く含む。

No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	口径	底径	器高	写真図版
1	土師器・甕	SI01･床面po.1・5	外面：ロクロナデ→ヘラケズリ（下部）。炭化物付着・火ハジケ痕。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	(21.5)	-	-	8-1
	土師器・甕	SI01･床面po.2	外面：ヘラケズリ（下部）。底面：摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理。1と同一個体か。	-	-	(8.0)	8-2
	土師器・甕	SI01･床面po.3	外面：ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。	-	-	-	8-3～5

第４図　SI01竪穴住居跡・出土遺物

②【SI07竪穴住居跡】

Ⅰ区北西部のN－12～15・W－48付近に位置している。SK08土壙と重複し、SK08土壙を埋め戻した後に構築されている。住居跡の壁は全体的に崩壊しており、カマドの敷設された北辺の一部が残存している。

［平面形・規模］北辺2.5m・南辺2.7m、西辺1.9m・東辺2.1mのやや歪んだ隅丸長方形である。

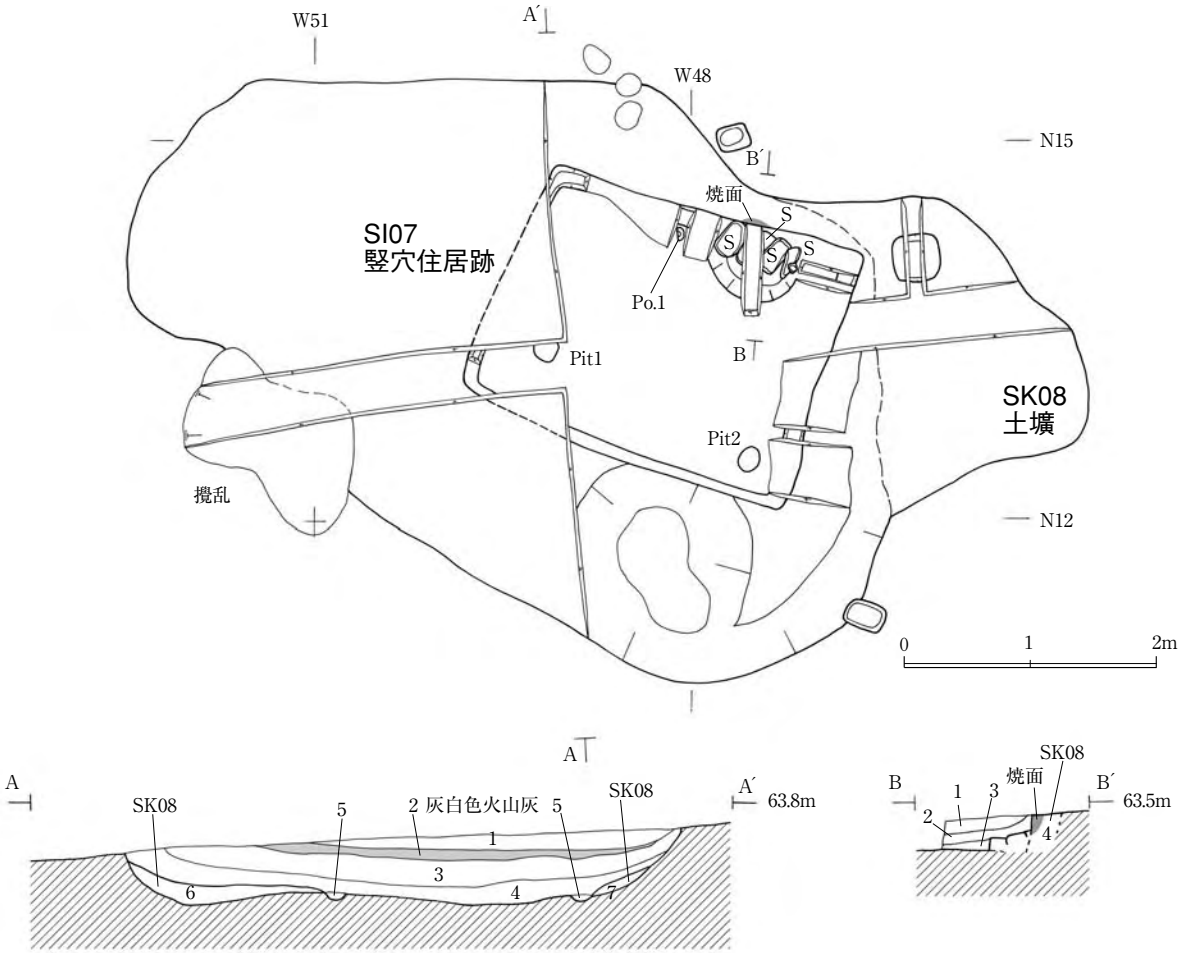
［方向］東辺でN－17°－Eである。

［壁］カマド付近を除く大部分が崩壊しており、残存状況は極めて悪い。カマド付近の壁で高さ15、である。

［床面］ほぼ平坦である。

［主柱穴］南辺寄りの場所で2個確認された。Pit1は大きさ約20cmの隅丸長方形状を呈する。埋土は地山礫を含む褐色土で、柱痕跡は確認されなかった。Pit2は長軸20cm、短軸15cmの楕円形状を呈する。埋土は地山小礫を含む褐色土で、柱痕跡は確認されなかった。ともに、平面形の確認のみで掘り下げは行っていない。北辺側の柱穴は確認できなかった。

［カマド］北辺東寄りに設けられている。残存状況は良好ではない。カマドの奥壁側の掘方で、平石



番号	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色（10YR2/2）	シルト	
2	灰白色（10YR7/1）	シルト	灰白色火山灰層。
3	褐色（10YR4/6）	シルト	地山小礫を含む。
4	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山小礫を少し含む。
5	褐色（10YR4/4）	シルト	壁材痕なし。
6	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山礫に富む。ＳＫ08埋土。
7	褐色（10YR4/6）	シルト	地山礫を含む。ＳＫ08埋土。

番号	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山粒を含む。やや粘質を帯びる。カマド内堆積土。
2	極暗赤褐色（5YR2/3）	シルト	炭化物・焼土粒を多量に含む。
3	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山礫を含む。カマドの掘り方。
4	褐色（10YR4/6）	シルト	地山礫を含む。ＳＫ08埋土。

第５図　SI07竪穴住居跡・SK08土壙

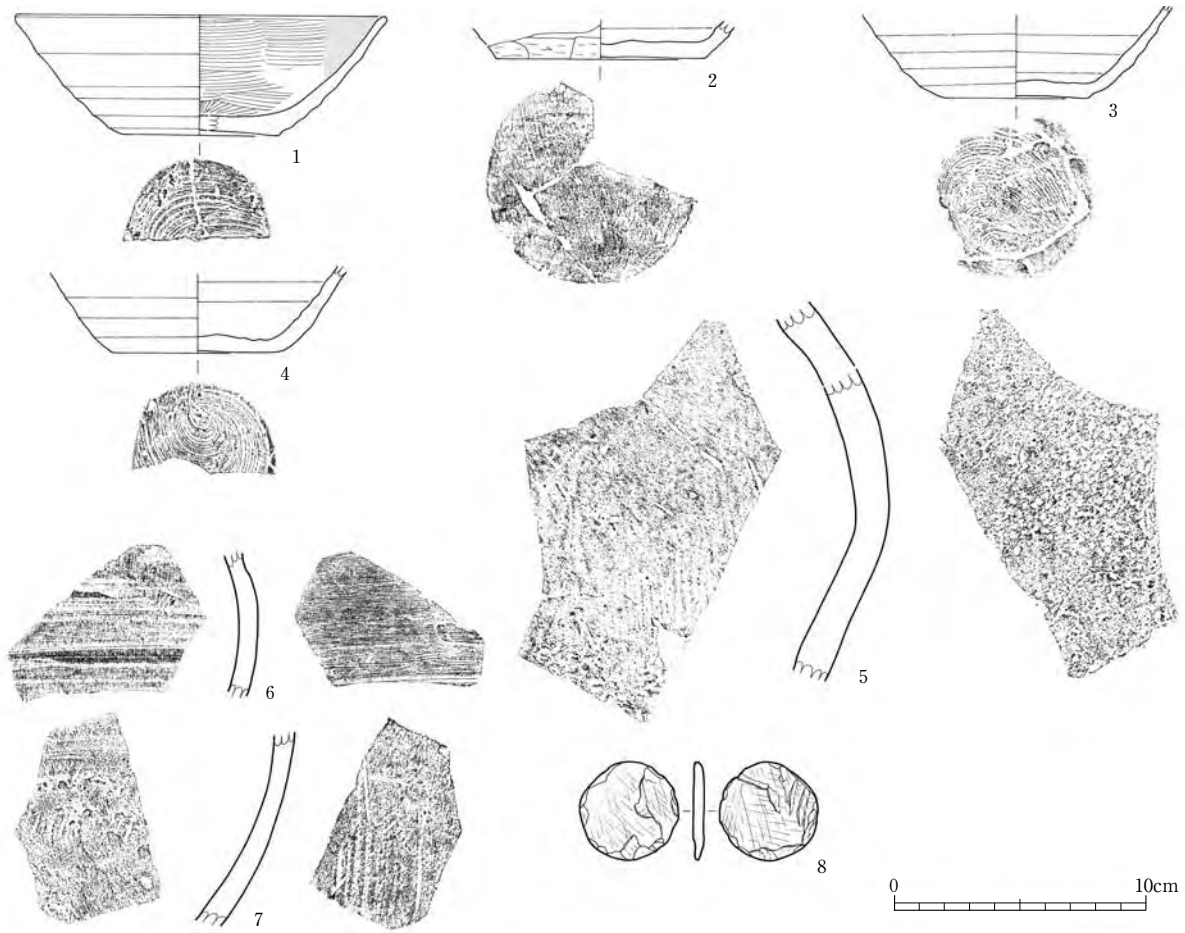
が並んだ状態で検出された。

［周溝］ほぼ全周で確認された。褐色シルトが堆積し、壁材痕は認められなかった。

［堆積土］４層が認められる。１層は黒褐色シルトで、２層は最大７cmの灰白色火山灰層である。３層は褐色シルト、４層は暗褐色シルトでともに地山礫を含んでいる。すべて、自然堆積である。

［出土遺物］遺構確認の際に、土師器小片、須恵器小片、石製模造品１点(8）が出土している。石製模造品は円形で、被熱により赤変している。

カマド崩壊土中から土師器坏１点(1)、須恵器坏２点（2・3)、床面から須恵器坏１点(4)が出土している。土師器坏は底部の切り離し技法が回転糸切りで、調整が施されていない。内面はヘラミガキの後に黒色処理されている。須恵器坏は、他と比べて底部が大きく底部の切り離し技法が静止糸切りで、体部下端から底部周辺に手持ちヘラケズリ調整が施されているもの(2)と、底部の切り離し技法が回転糸切りで、調整の施されないもの(3)がある。床面出土の須恵器坏は、底部の切り離し技法が回転糸切りで、調整の施されないものである。内面には油煙状の黒い付着物が残存する。



No.	種類	出土遺構・層位	特　　徴	口径	底径	器高	写真図版
1	土師器・坏	SI07・カマド内	外面：ロクロナデ。底面：回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	(15.0)	5.8	5.0	8－7
2	須恵器・坏	SI07・カマド内	外面：手持ちヘラケズリ。底面：静止糸切り→手持ちヘラケズリ。内面：ロクロナデ	-	8.5	-	8－8
3	須恵器・坏	SI07・カマド内・床面	外面：ロクロナデ。底面：回転糸切り無調整。内面：ロクロナデ。	-	6.8	-	8－9
4	須恵器・坏	SI07・床面po.1	外面：ロクロナデ。炭化物付着。底面：回転糸切り無調整。内面：ロクロナデ。炭化物付着。	-	5.8	-	8－10
5	須恵器・甕	SI07・遺構確認	外面：平行タタキ→ロクロナデ。内面：オサエ	-	-	-	8－11
6	須恵器・甕	SI07・遺構確認	外面：平行タタキ→ロクロナデ→ヘラケズリ(下部)。内面：アテ具痕→ロクロナデ	-	-	-	8－12
7	須恵器・甕	SI07・遺構確認	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	-	-	-	8－13
	須恵器・甕	SI07・遺構確認	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	-	-	-	8－14
	須恵器・甕	SI07・遺構確認	外面：ロクロナデ。内面：アテ具痕→ロクロナデ。	-	-	-	8－15
	土師器・坏	SI07・遺構確認	外面：ロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	-	-	-	8－16～18
	土師器・甕	SI07・遺構確認	外面：平行タタキ→ロクロナデ→ヘラケズリ（下部)。内面：ロクロナデ。	-	-	-	8－19～20
	土師器・甕	SI07・遺構確認	外面：ロクロナデ？（摩滅）内面：摩滅	-	-	-	8－21～23
8	石製模造品	SI07・遺構確認	敲打→擦痕。被熱による赤変。	径3.9、厚さ0.3			8－24

第６図　SI07竪穴住居跡出土遺物

（2）土塁跡・溝跡

①【SX03土塁跡】

Ⅰ区の断面A－A´付近からD－D´付近に残存している。

［平面形・規模］上幅約3.0～2.0m、基底幅最大約6.1m、高さは約0.6～0.2m残存していた。旧表土を取り除いた平坦な地山岩盤～漸移層を基底面としている。

［方向］SD02に平行して、構築されている。

［積土］地山礫・ブロックを含むにぶい黄褐色～褐色土を厚さ5～30cmほどの単位で積まれていた。積土中には、いずれも炭化物が含まれていた。

［出土遺物］発見されていない。

②【SD02溝跡】

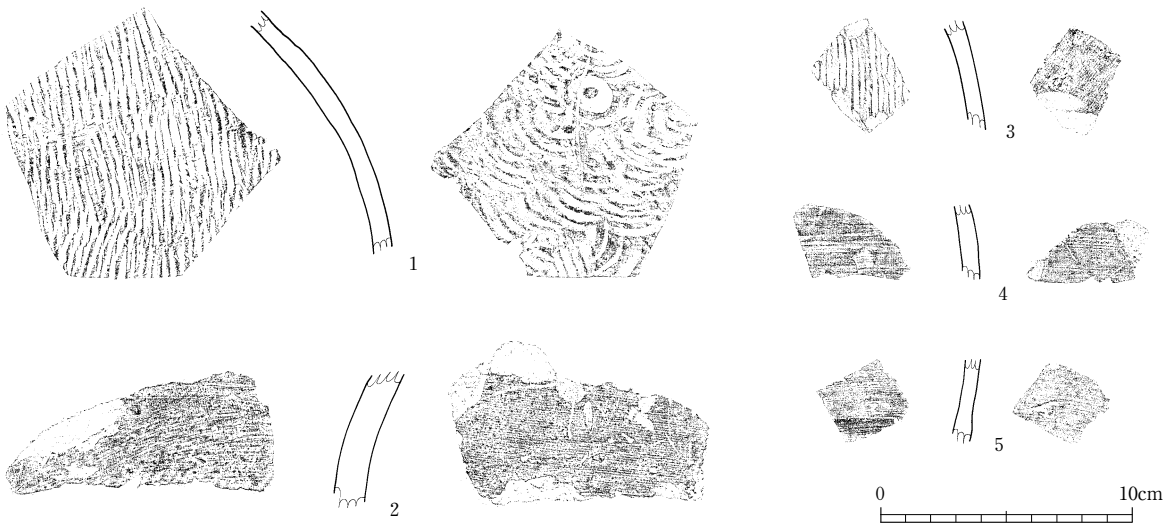
Ⅰ区では約60m検出しており、さらに西北西に続いていくが、東端部にあたる。区の東側N－10・E－５付近は、急傾斜であるため地山も含めて崩落流失が著しいため、SD02溝跡がさらに続いていたのかどうかについては不明である。

［平面形・規模］上幅約3.5～2.9m、下幅2.7～1.9m、深さ約1.1m、断面形は逆台形状である。底面はほぼ平坦で、断面A－A´の北側で底面に高さ36cmの段がつく。

［方向］東側のW－0－Eで、W－16°－N、ほぼ中央部のW－18でW－18°－N、段から上のW－31でW－18°－N、西側のW－45でW－6°－Nである。段から上の西側で方向をやや西寄りに変えている。

［堆積土］堆積層は概ね3層に分けられ、いずれも自然堆積である。下部はにぶい黄褐色～褐色の崩落土、その上面に灰白色火山灰層、その上部に暗褐色～黒褐色シルトが堆積している。

［出土遺物］灰白色火山灰層の上部の暗褐色シルト・黒褐色シルトから須恵器片８点、土師器片２点が出土している。



No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	口径	底径	器高	写真図版
1	須恵器・甕	SD02・上部層	外面：平行タタキ、内面：アテ具痕	-	-	-	8－27
2	須恵器・甕	SD02・上部層	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	-	-	-	8－28
3	須恵器・甕	SD02・上部層	外面：平行タタキ、内面：アテ具痕→ナデ	-	-	-	8－29
4	須恵器・甕	SD02・上部層	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	-	-	-	8－30
5	須恵器・甕	SD02・上部層	外面：ロクロナデ、内面：アテ具痕→ロクロナデ	-	-	-	8－31

第７図　SD02溝跡出土遺物

③【SD04】

断面図作成のため断ち割り調査を実施した他は確認調査のみである。南西側のS－２・W－25付近では削平されており、残存していないが、北端部は確認している。

［平面形・規模］上幅約2.1～1.8m、下幅約1.0～0.8m、深さ約0.6m、断面形はU字状を呈している。底面はほぼ平坦である。

［方向］北側のN－18°・W－38でN－18°—W、N－9・W－33でN－31°－Wである。南側でやや方向を変えているが、削平されているために明確ではない。

［堆積土］堆積層は自然堆積で、下部に黒褐色シルト、その上面に灰白色火山灰層が堆積している。

［出土遺物］発見されていない。

④【SD05】

断面図作成のため断ち割り調査を実施した他は確認調査のみである。なお、埋め戻しの際に一部表土を除去し北端部を確認している。

［平面形・規模］上幅約4.2～2.6m、下幅約2.2～1.9m、深さ約0.8m、断面形は逆台形状である。底面はほぼ平坦である。

［方向］区西中央のN－3・W－39でW－49°－N、。区 西S－６・W－33でN－2°－Wである。概ねSD04と平行する。

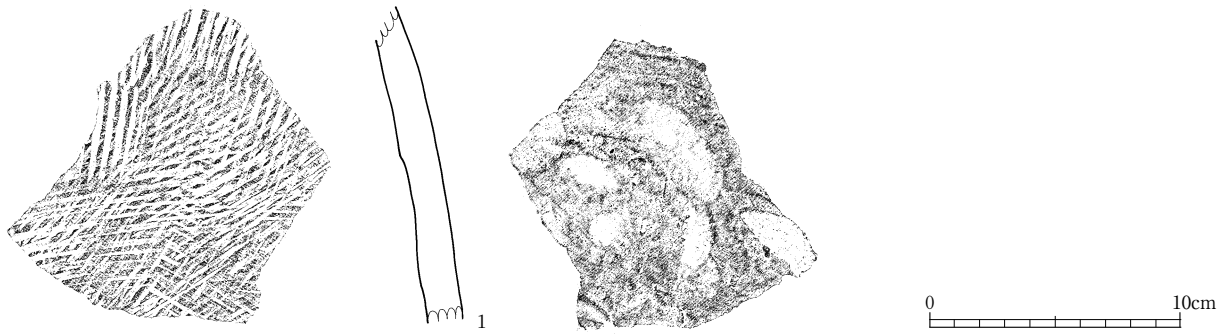
［堆積土］堆積層は自然堆積で、下部に暗黄褐色～黒褐色シルト・粘土質シルト、その上面に灰白色火山灰層が堆積している。

［出土遺物］断ち割り調査部分から須恵器大甕破片１点が出土している。

（3）土壙

【SK08土壙】

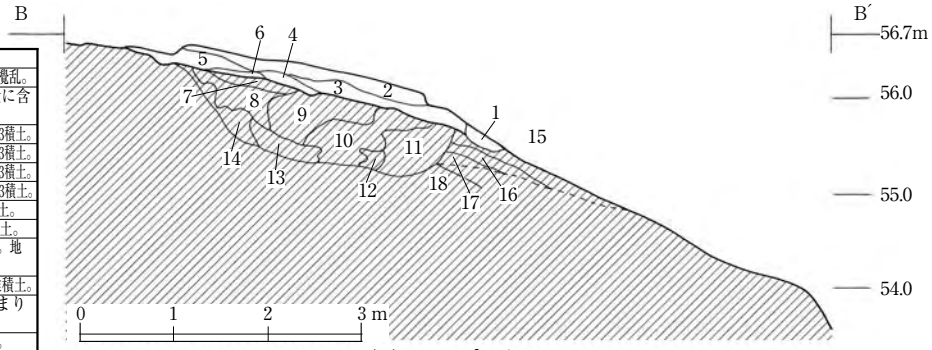
Ⅰ区のN－12～15・W－48付近に位置している。SI07と重複し、SI07よりも古い。長径7.6m、短径4.8m、深さ約55cmの不整な楕円形をしている。にぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。地山は基盤岩層ではなく、粘土層になっている。出土遺物は認められない。



No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	口径	底径	器高	写真図版
1	須恵器・甕	SD05・堆積層	外面：平行タタキ、内面：アテ具痕→ナデ	-	-	-	8－26

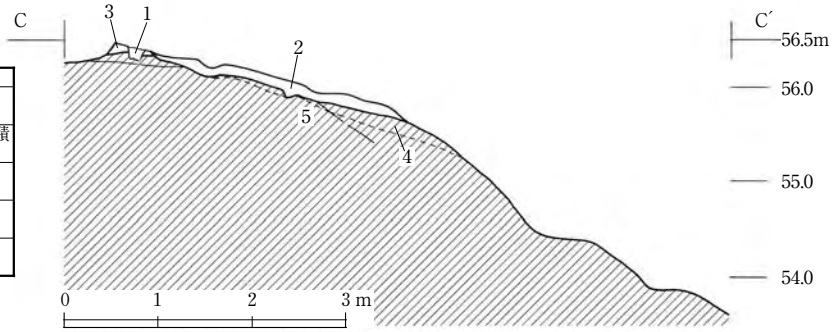
第８図　SD05溝跡出土遺物

番号	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	黒色（10YR2/1）土をブロック状に含む。木の根攪乱。
2	明黄褐色（10YR6/8）	シルト	地山礫（径10～40mm）地山ブロックを多量に含む。黒褐色土が斑状に混じる。SX03積土。
3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山礫（径10～40mm）地山ブロックを多量に含む。SX03積土。
4	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山礫（径10～40mm）地山ブロックを多量に含む。SX03積土。
5	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山礫（径10～40mm）地山ブロックを多量に含む。SX03積土。
6	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山礫（径５～30mm）地山ブロックを少量含む。SX03積土。
7	黒色（2.5Y2/1）	シルト	炭化物・地山粒を含む。地山の古い風倒木痕堆積土。
8	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山礫（径5～20mm）を含む。古い風倒木痕堆積土。
9	黄褐色（2.5Y5/4）	シルト	地山礫を主体とする。黒褐色シルトが一部混じる。地山の古い風倒木痕堆積土。
10	黄褐色（10YR5/8）	シルト	地山主体。地山礫が混じる。地山の古い風倒木痕堆積土。
11	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山礫（径5～10mm）を少量含む。しまりなし。地山の古い風倒木痕堆積土。
12	黒褐色（10YR3/1）	シルト	地山ブロック混じる。地山の古い風倒木痕堆積土。
13	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山礫を少量含む。地山の古い風倒木痕堆積土。
14	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山礫・地山ブロックを多く含む。地山の古い風倒木痕堆積土。
15	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山礫（径5～10mm）を少量含む。しまりあり。地山。
16	黒褐色（10YR3/1）	シルト	地山礫（径5～10mm）を少量含む。堅い。地山。
17	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山礫（径5～15mm）を少量含む。堅い。地山。
18	黄褐色（10YR5/8）	シルト	地山礫（径5～30mm）を少量含む。しまりあり。部分的に岩盤に移行する。地山。



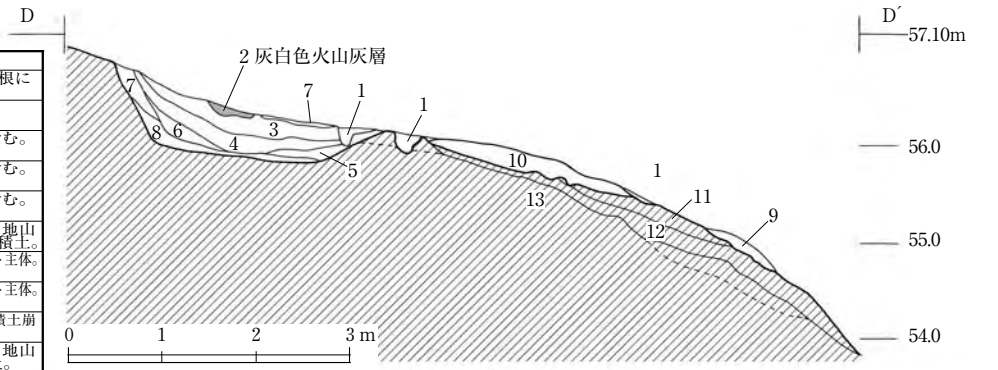
（2）B－B´ 断面

番号	土色	土性	備考
1	黒色（10YR2/1）	シルト	地山礫・地山粒を少量含む。木の根攪乱。
2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物を含む。地山礫（径5～20mm）を含む。SX03積土崩壊土か。
3	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）	シルト	地山礫（径5～30mm）・地山ブロックを多く含む。SX03積土。
4	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山礫（径5～10mm）を少量含む。しまりあり。地山。
5	黄褐色（10YR5/8）	シルト	地山礫（径5～30mm）を多く含む。しまりあり。部分的に岩盤に移行する。地山。

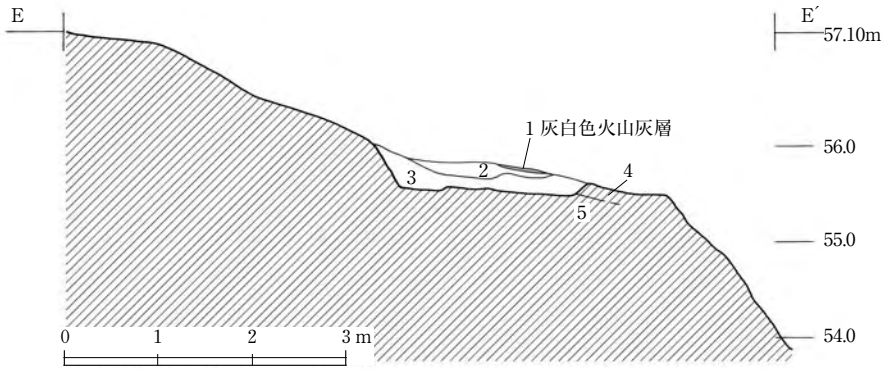


（3）C－C´ 断面

番号	土　　色	土性	備　　考
1	黒色（2.5Y2/1）	シルト	地山ブロックを若干含む。木の根による撹乱。
2	灰白色（10YR7/1）	シルト	灰白色火山灰層。SD02堆積土。
3	褐色（10YR4/4）	シルト	地山礫（径5～20mm）を多く含む。SD02堆積土。
4	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山礫（径5～20mm）を多く含む。SD02堆積土。
5	褐色（10YR4/4）	シルト	地山礫（径5～10mm）を少量含む。SD02堆積土。
6	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山礫（径5～10mm）を含む。地山シルトを部分的に含む。SD02堆積土。
7	褐色（10YR4/6）	シルト	地山礫をほとんど含まない。地山シルト主体。暗褐色土が少量混じる。SD02堆積土。
8	褐色（10YR4/4）	シルト	地山礫をほとんど含まない。地山シルト主体。暗褐色土が少量混じる。SD02堆積土。
9	暗灰黄色（2.5YR4/2）	シルト	地山礫・地山土が混じる。SX０３積土崩壊土。
10	暗灰黄色（2.5YR4/2）	シルト	地山礫（径5～30mm）を含む。地山シルトブロック主体。SX03積土。
11	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山礫（径5～10mm）を少量含む。しまりあり。地山。
12	黒褐色（10YR3/1）	シルト	地山礫（径5～10mm）を少量含む。しまりあり。堅い。地山。
13	黄褐色（10YR5/8）	シルト	地山礫（径5～30mm）を多く含む。部分的に岩盤に移行する。地山。



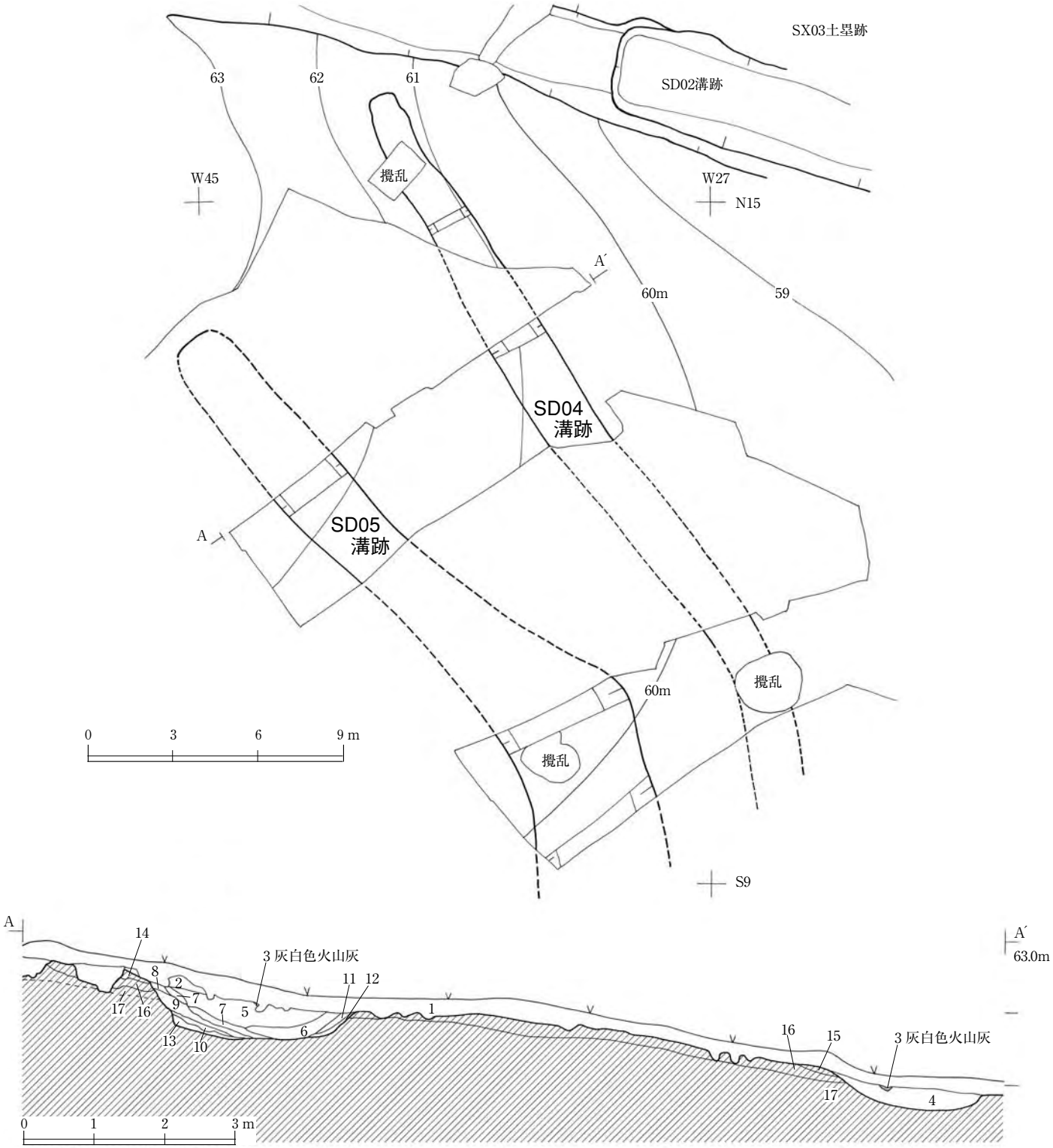
（4）D－D´ 断面



（5）E－E´ 断面

番号	土色	土性	備考
1	灰白色（10YR7/1）	シルト	灰白色火山灰層。SD02堆積土。
2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山礫（径5～50mm）を多く含む。SD02堆積土。
3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山礫（こぶし大のものも含む）を多量に含む。SD02堆積土。
4	黄褐色（10YR5/8）	シルト	地山礫（径5～30mm）を多く含む。岩盤の部分もあり。地山。
5	黄褐色（10YR5/8）	シルト	地山礫（径5～30mm）を多く含む。岩盤。地山。

第10図　SD02溝跡・SX03土塁跡（2）

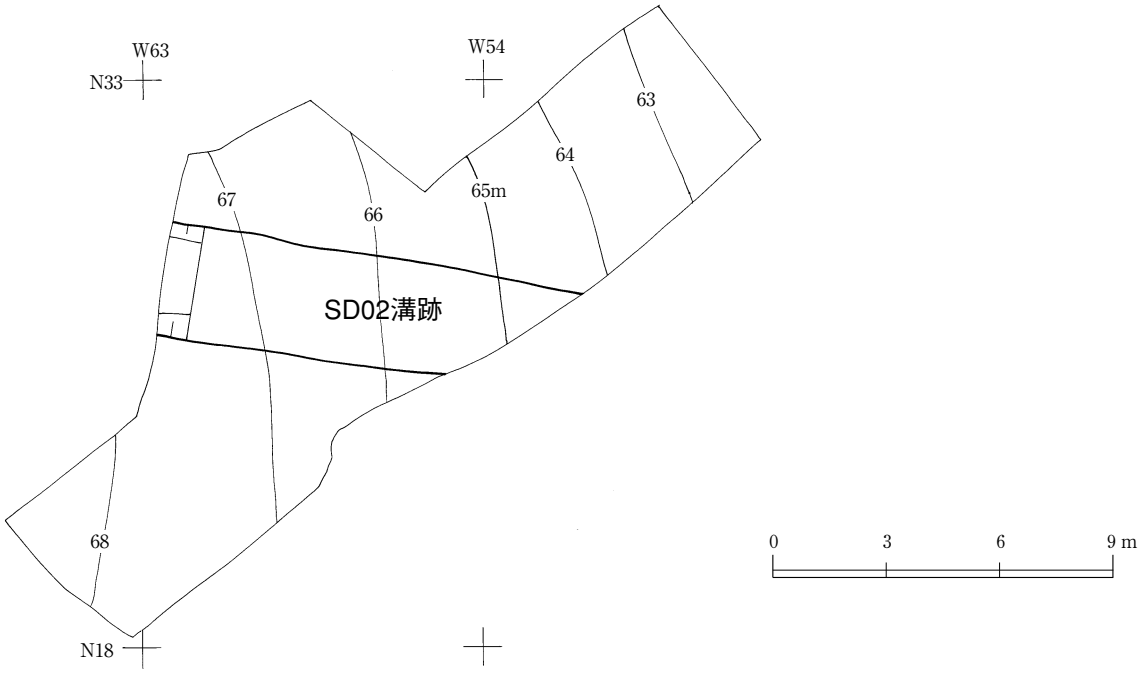


番号	土　　色	土　　性	備　　考
1	黒褐色（10YR3/1）	シルト	現表土－木の根などにより凸凹あり。
2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	地山小礫（径5～8mm）を少量含む。SD05堆積土。
3	灰白色（10YR7/1）	シルト	灰白色火山灰層－やや汚れている。部分的にみられる。SD05・04堆積土。
4	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	地山小礫（径5～8mm）を多く含む。炭化物を若干含む。SD04堆積土。
5	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	２層に似るが、黒（茶）色味が強い。SD05堆積土。
6	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト	地山小礫（径5～8mm）を少量含む。SD05堆積土。
7	黄褐色（2.5Y4/3）	シルト	地山小礫（径5～20mm）を多量に含む。炭化物をわずかにふくむ。SD05堆積土。
8	暗灰黄褐色（2.5Y4/2）	シルト	地山小礫（径5～20mm）を含む。SD05堆積土。
9	暗オリーブ色（2.5Y3/3）	シルト	地山小礫（径5～10mm）を含む。5層より黒味が強い。SD05堆積土。
10	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	地山小礫（径5～10mm）を少量含む。他の層に比べてしまり弱い。SD05堆積土。
11	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	地山小礫（径5～10mm）を少量含む。７層に似るが、地山小礫は少ない。SD05堆積土。
12	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山小礫（径5～10mm）を含む。SD05堆積土。
13	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山小礫（径5～10mm）を含む。７層と似た土が混じる。SD05堆積土。
14	黒褐色（10YR3/4）	シルト	地山小礫を含む旧表土。
15	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山漸移層の再堆積層。
16	明褐色（10YR3/3）	シルト	地山漸移層－部分的に木の根撹乱あり。
17	褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	地山－シルトの単純層と地山小礫などを含む層がある。

第11図　SD04・SD05溝跡

２．Ⅱ区

確認調査のみを行っている。SD02の西側延長部分を確認し、一部断ち割り調査を実施した。SD02は上幅2.7～2.8m、下幅1.8m、深さ65cm、断面形は逆台形状である。方向はN－5°－Eである。出土遺物はない。



第12図　SD02溝跡（調査Ⅱ区）

３．Ⅲ区

確認調査のみを行っている。SD02の西側延長部分とSX03の積土を確認し、一部断ち割り調査を実施した。

SD02は上幅3.0m、下幅1.8m、深さ99cm、断面形は逆台形状である。方向はN－18°－Eである。出土遺物はない。

SX03は、SD02の北側の約4m×1mの細長い範囲で、地山岩盤上に積土を確認した。積土は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色土で、厚さは最大で5cmである。出土遺物はない。

４．Ⅳ区

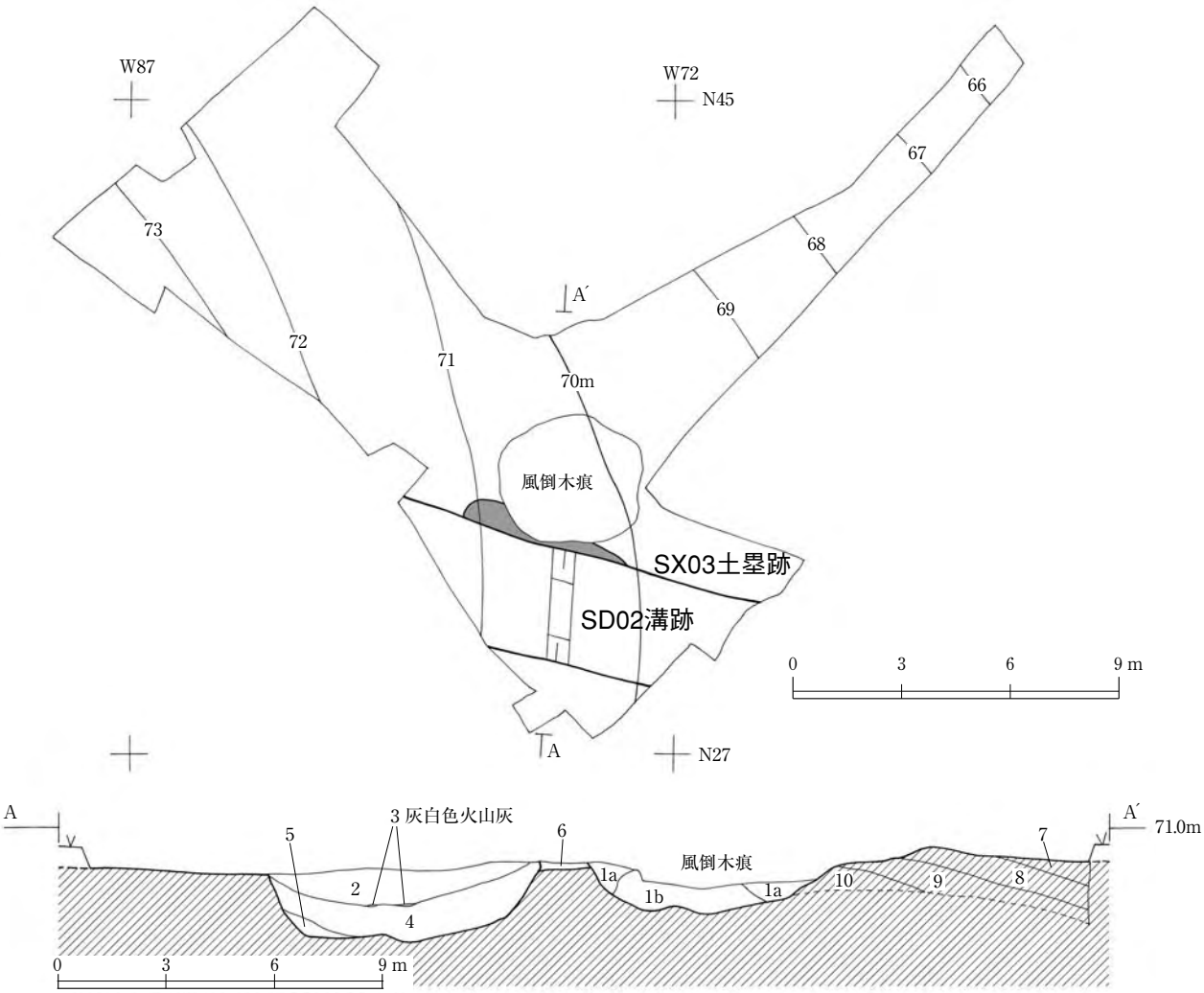
確認調査のみを行っている。ＳＤ04の南側延長部分とＳＩ06竪穴住居跡を検出している。ＳＤ04は上幅1.85m、下幅0.8m、深さ24cm、断面形は逆台形状である。方向はN－15°－Wである。断ち割り調査を実施した部分からロクロ調整の土師器の甕の胴部破片が出土している。

SI06竪穴住居跡は北半部を確認しただけであり、南半部が調査区外に広がる。北辺が4.2m、東辺は1.6m以上である。カマドは東辺に敷設されている。遺構確認時に堆積土北側の一部で灰白色火山灰を確認している。堆積土中から土師器坏１点、土師器小片１点が出土している。土師器坏は内面黒色処理が施されている。カマド内堆積土からは、ロクロ調整の土師器の甕の破片が10片（うち、３片は同

一個体）と坏小片１点が出土している。坏小片は内面黒色処理が施されている。

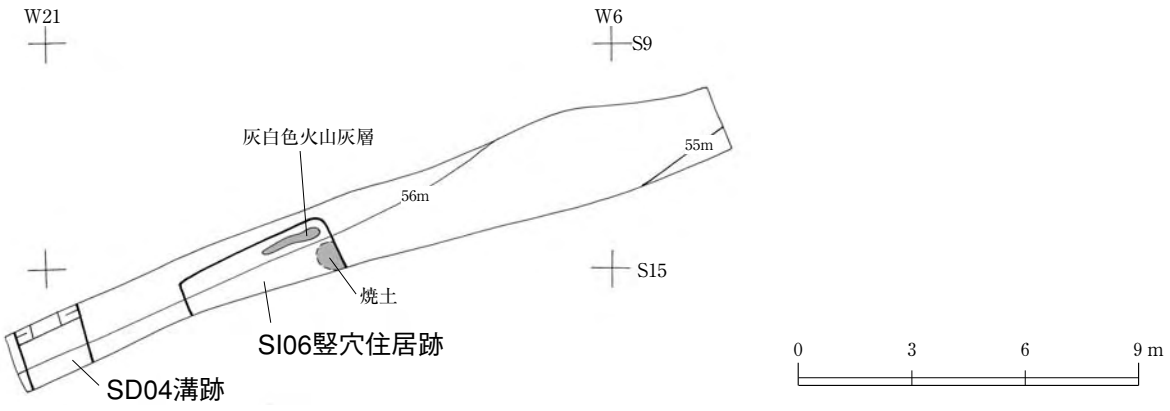
５．Ⅴ区

確認調査のみを行っている。遺構は検出されなかった。

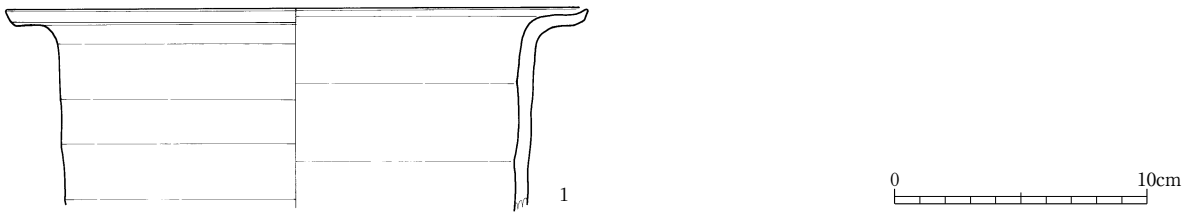


番　号	土　　色	土　　性	備　　考
1a	暗褐色（10YR3/3）	シルト	木炭若干含む。新しい風倒木痕堆積土。
1b	黄褐色（10YR5/6）	シルト	地山礫を含む。新しい風倒木痕堆積土。
2	黒褐色（10YR2/2）	シルト	地山小礫をわずかに含む。SD02堆積土。
3	にぶい黄橙色（10YR7/2）	シルト	灰白色火山灰層。SD02堆積土。
4	褐色（10YR4/4）	シルト	地山小礫に富む。地山粒含む。SD02堆積土。
5	黄褐色(10YR5/6)	グラベル	地山礫・地山土を多く含む。西側からの崩落土。SD02堆積土。
6	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山小礫・木炭を若干含む。SX03積土。
7	褐色（10YR4/4）	シルト	地山礫に富む。SX03積土崩壊土を含む再堆積層か。
8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山礫を含む。旧表土起源層。
9	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山礫に富む。地山漸移層。
10	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	岩盤。地山。

第13図　SD02溝跡・SX03土塁跡（調査Ⅲ区）



第14図　SD04溝跡・SI06竪穴住居跡（調査Ⅳ区）



No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	口径	底径	器高	写真図版
1	土師器・甕	SI06・カマド		-	-	-	8－6

第15図　SI06竪穴住居跡出土遺物

Ⅲ　考　察

出土遺物は少なく、種類には土器と石製品がある。土器の種類には土師器と須恵器があり、土師器が多い。また、赤焼土器は出土していない。石製品は石製模造品が１点出土したのみである。以上のように、土器の出土量が少ないため、ここでは出土土器全体を通しての分類は行わず、個々の遺構について検討する。

今回の調査では、土塁１条、溝３条、竪穴住居跡３軒、土壙１基を発見した。これらの中では、特に土塁と溝が注目される。以下、最初に各遺構の年代について検討し、次に土塁と溝の性格について検討する。

１．遺構の年代

（1）竪穴住居跡の年代について

SI01・07・06竪穴住居跡から土器が出土している。このうち、住居跡に伴う遺物が出土しているのは、SI01・07竪穴住居跡である。

①SI01竪穴住居跡出土土器の年代

SI01竪穴住居跡では、床面からやや広口で鉢状を呈する内面黒色処理を施したロクロ調整の土師器甕が出土している。県内では多賀城跡をはじめとする城柵官衙遺跡ほか、一般遺跡においても類例が

見出だされる。この中でも特に多賀城跡では、五万崎地区の灰白色火山灰層下で検出されたSK2270土壙（多賀城跡調査研究所：1995）から、多量の坏類や瓦片（第Ⅰ～Ⅳ期）とともに出土しており、年代を考える上で参考になる。第Ⅳ期瓦は貞観11年（869）の陸奥国大地震の際の復興瓦とされており、この瓦と共伴するSK2270土壙出土遺物は概ね 9 世紀第 4 四半期を中心とした年代に相当するものとされている。多賀城跡SK2270土壙出土の甕とSI01竪穴住居跡出土の甕を比較すると、口縁部の形状が多賀城跡のものは受口状を呈し、SI01竪穴住居跡のものはやや短く外折し、受口状を呈さない等、細部に違いも認められることから、ここでは、SI01竪穴住居跡の年代は 9 世紀後葉頃を中心とした年代と、やや幅を持って捉えておく。

②SI07竪穴住居跡出土土器の年代

SI07竪穴住居跡では、床面から須恵器坏が出土している。他に、カマド崩壊土から土師器坏・須恵器坏が出土している。

床面とカマド崩壊土出土の須恵器坏は、ともに体部上半部から口縁部を欠いているため、器形的な特徴は把握できないが、底部の切り離し技法が回転糸切りで調整が施されていない。このような底部の切り離し技法で、その後に調整が施されない須恵器の坏の年代については、これまでの須恵器研究の成果によれば、概ね 9 世紀代のものとみられる。また、カマド内堆積土出土の土師器坏は、平底で体部がやや内湾気味にゆるやかに立ち上がり、底部が口縁部に比較してやや小さいものである。底部の切り離し技法は回転糸切りで、調整の施されないものである。このような器形や底部の切り離し技法の土師器坏の年代は、これまでの研究成果によれば 9 世紀以降となる。

以上により、SI07竪穴住居跡の年代は 9 世紀以降で、その下限年代については住居跡の堆積層中に10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰層が認められることから、10世紀前葉頃以前と考えられる。

なお、底部資料であるが、底部切り離し技法が静止糸切り、体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリ調整の施された須恵器坏が出土している。これは、特徴が日の出山窯跡群A地点（宮城県教育委員会：1970）出土の須恵器坏と共通しており、日の出山窯跡では多賀城創建瓦が共伴することから、8 世紀第 2 四半期頃を中心とした年代観で捉えられており、混入品と考えられる。

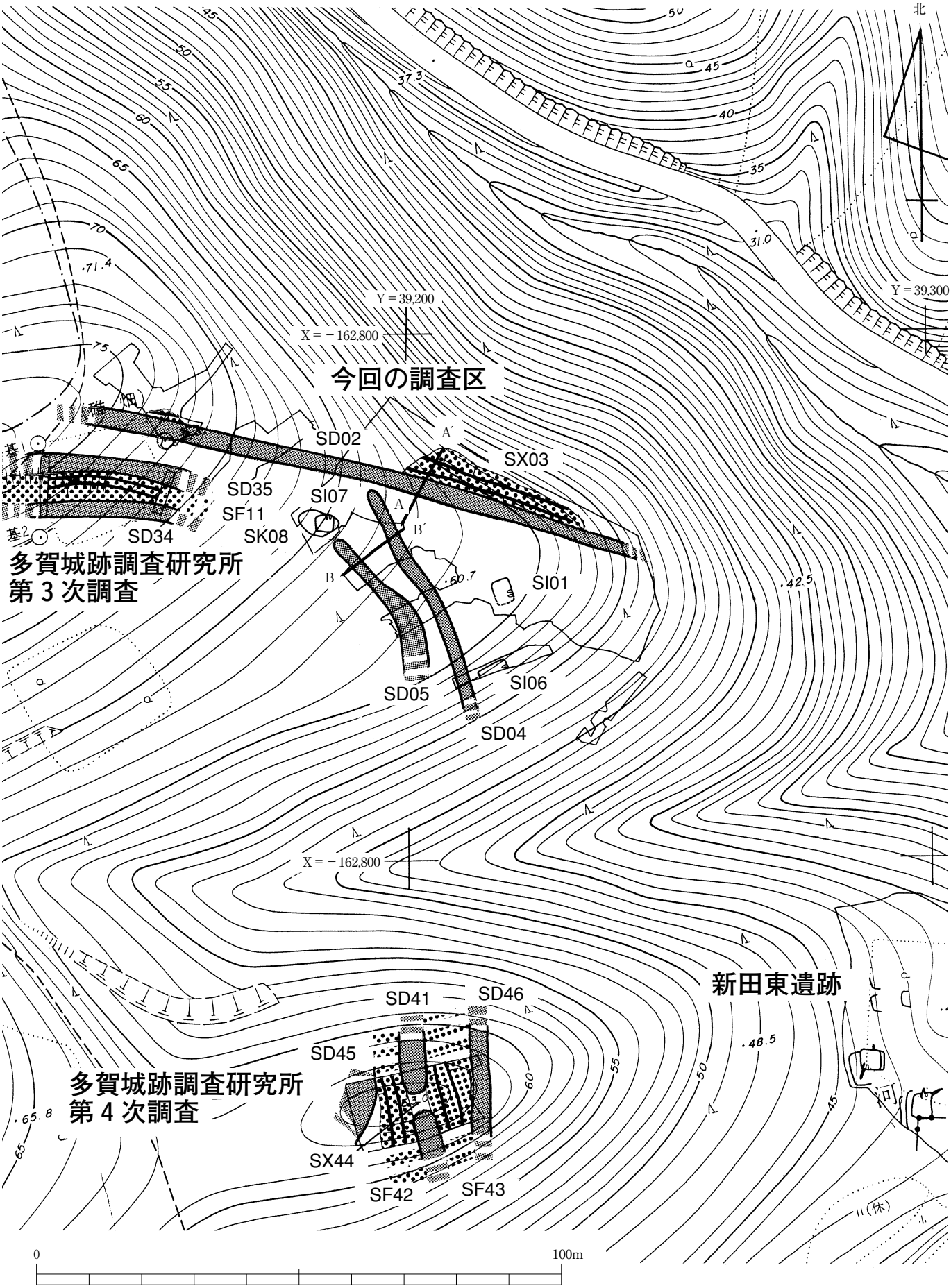
（2）その他遺構の年代について

以上の 2 軒の竪穴住居跡以外のSI06竪穴住居跡、SD02・04・05溝跡、SX03土塁跡、SK08土壙からは、遺構に確実に伴う遺物は出土していない。これらの中で、SD02・04・05溝とSI07竪穴住居跡の堆積土上部で灰白色火山灰層が確認されている。したがって、いずれの遺構も灰白色火山灰の降下時期とされる10世紀前葉頃以前の古代の遺構と捉えられる。

また、SK08土壙については、前述のSI07竪穴住居跡と重複してこれより古いことから、この土壙も古代の遺構と考えられる。

2．土塁と溝について

今回の調査で発見したSX03土塁跡とSD02溝、SD04・05溝跡は、これまで発掘調査で発見されている桃生城跡の外郭北辺と東辺に隣接することから、桃生城跡の外郭区画施設に関連するものである可能性が高い。以下では、今回の調査で発見した土塁・溝の性格を検討するにあたり、先行する多賀城



第16図　桃生城北東部の様相

跡調査研究所の調査成果の概略をたどっておくことにする。

（1）多賀城跡調査研究所による発掘調査の成果

桃生城跡の外郭北辺と東辺北端部については、北辺西端部・中央部・東端部、東辺北端部を対象にこれまで多賀城跡調査研究所により発掘調査が実施されている。

①外郭北辺東端部の調査（第17図・1994年）

現存する北辺土塁の断ち割り調査が2箇所で行われ、SF11土塁跡とその南北でSD34溝跡・SD35溝跡が確認された。SF11土塁跡は地山切り出しによる基底面が幅約６ｍで、西側で最大約60cmの積土を確認している。地山混じりの黄色土をやや粗い互層状に積み上げている。

SD34・SD35溝跡はともに、SF11土塁の崩壊土によって埋まっている。外側のSD35溝跡は北側の立ち上がりを確認しておらず、上幅2.7ｍ以上、堆積土の上部に灰白色火山灰層が確認されている。内側のSD34溝跡は西端部の断面図で上幅2.8m、堆積土に灰白色火山灰層は確認されていない。

これらの年代については出土遺物と灰白色火山灰の存在から８世紀後半から10世紀前葉頃と考えられ、性格としては桃生城の外郭北辺区画施設と捉えられている。

②外郭北辺中央部の調査（第１図・1974・75年）

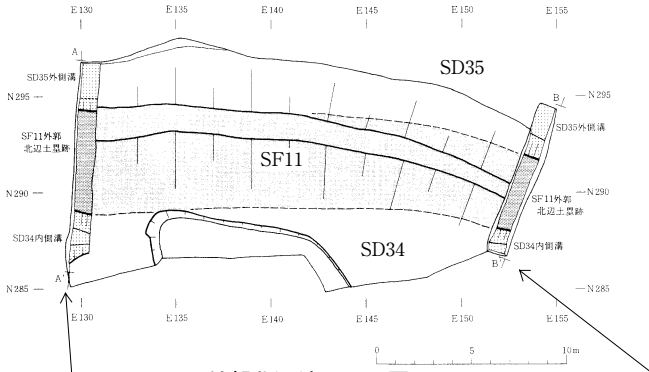
北辺中央の第1次・第2次調査（第1図）では現存高140cmのSF11土塁跡は新旧2時期の重複が確認され、新土塁築土中に焼土を含むとする顕著な特徴が指摘された。

③外郭北西隅部の調査（第18図・1995年）

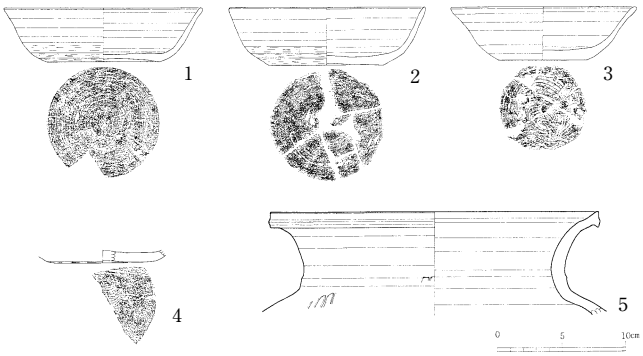
桃生城跡外郭北西隅の調査では、３条並ぶ「土手状の高まり」が現存地形においても確認され、桃生城跡「長者森」比定説の有力な根拠のひとつとされた場所である。調査は3条並ぶ土手状の高まりを直交方向に断ち割る形で行われた。調査の結果、南東からSD47溝跡・SF48B土塁跡・SD49溝跡・SF50土塁跡・SD51溝跡・SF52土塁跡と、それぞれ３条の土塁跡と溝跡が検出された。このうち、最も残りの良い現存高約170cmのSF48B土塁跡では、SF48A築地塀跡からの新旧２時期の変遷が認められた。SF48A築地塀の崩壊土上には薄い焼土層も確認されている。溝跡では最も内側のSD47溝跡および最も外側のSD51溝跡の下部において、灰白色火山灰層が検出されている。ここでは、灰白色火山灰が降下する10C前葉に、少なくともSD47・SD51溝はまだ溝としての機能を失っていなかったことがわかる。この地区からの出土遺物はない。

④外郭東辺地区の調査（第19図・1995年）

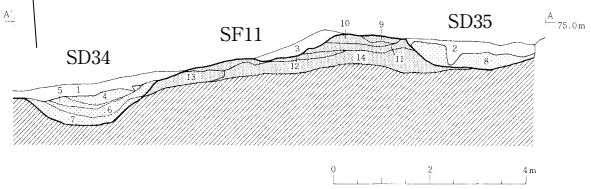
SF42・43の土塁跡３条、その間にはSD41溝跡とSX44土橋状遺構、そして両土塁跡の東側にはSD46溝跡、西側にはSD45溝跡が検出された。土塁は両方ともに掘込地業を伴い、掘込地業を埋める形で黒褐色～黄褐色土および岩礫を積み上げている。溝上端からの高まりは20～30cmで、土塁の残存状況は良好ではない。検出された溝跡３条のうち、中央のSD41溝跡は上幅約４～５ｍの大溝で、下部の土塁崩壊土上に灰白色火山灰層が認められている。土塁両脇のSD45・46の堆積土はともに黒褐色土で、灰白色火山灰層は確認されなかった。出土遺物はSX44土橋付近の１層から底部の切り離し技法が回転ヘラ切りで調整の施されない須恵器坏が２点（１・２）、SD41溝跡堆積土から土師器・須恵系土器が出土している。



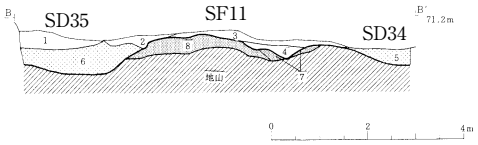
外郭北辺地区平面図



外郭北辺地区出土遺物



①外郭北辺地区西壁断面図



②外郭北辺地区東壁断面図

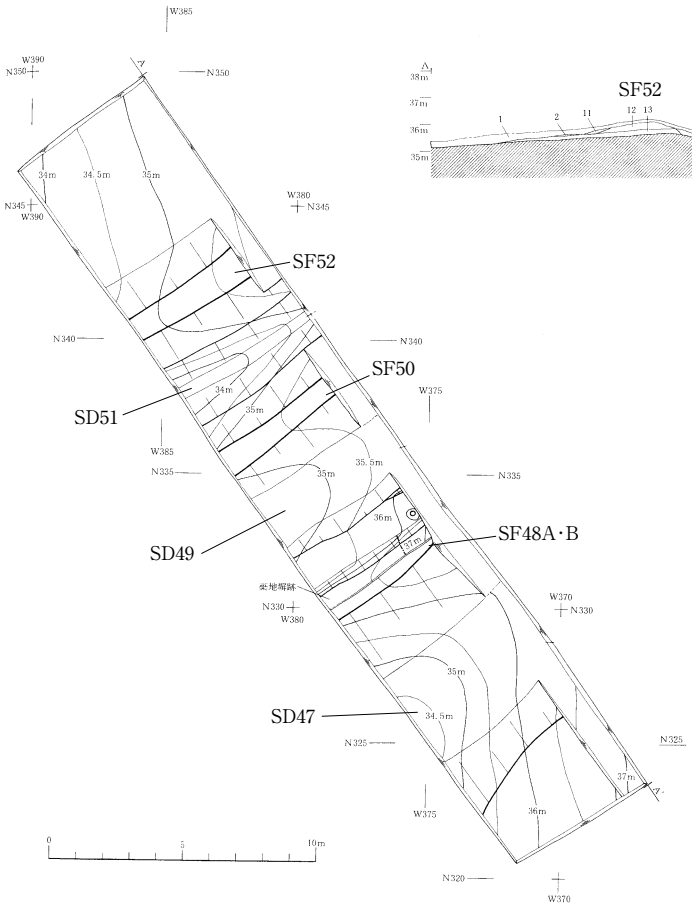
大別層	細別層	色調	土質	概要
表土	1	10YR3／3 暗褐色	シルト	地山小粒を含む
	2	10YR13／3 暗褐色	シルト	地山小粒を含む
	3	7.5YR4／4 褐色	シルト	地山小粒を若干含む
SD34堆積土	4	10YR4／6 褐色		地山小粒を比較的多く含む
	5	7.5YR5／4 にぶい褐色	シルト	地山小粒を若干含む
	6	10YR5／6 黄褐色	粘土質シルト	2cm程の地山粒を若干含む
	7	7.5YR4／4 褐色	粘土質シルト	3cm程の地山粒を若干含む
SD35堆積土	8	10YR4／6 褐色	粘土質シルト	1cm程の地山粒を比較的多く含む 赤色（10R4／8）の微細な礫を少し含む
SF11積土	9	7.5YR4／4 褐色	シルト	地山小粒を比較的多く含む
	10	7.5YR5／4 にぶい褐色	シルト	2cm程の地山小礫を比較的多く含む
	11	7.5YR5／4 にぶい褐色	シルト	3～6cm程の地山礫を若干含む
	12	10YR5／6 黄褐色	粘土質シルト	1cm程と3～6cm程の地山礫を若干含む
	13	10YR4／4 褐色	シルト	2cm程の地山礫を若干含む、しまりあり
	14	7.5YR5／4 にぶい褐色	砂質シルト	1～5cm程の地山礫を多く含む、しまりあり

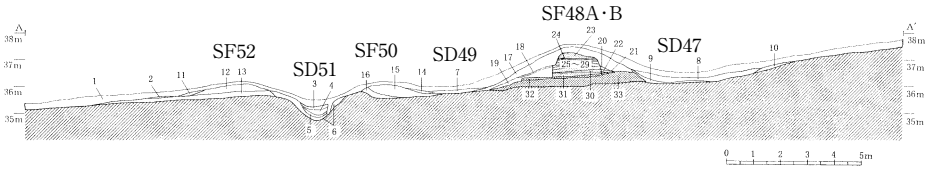
※ トレンチ北壁で2層と8層との間に灰白色火山灰が部分的に堆積していた

大別層	細別層	色調	土質	概要
表土	1	10YR3／3 暗褐色	シルト	地山小粒を含む
	2	7.5YR4／4 褐色	シルト	地山小粒を若干含む
	3	7.5YR6／4 にぶい橙	シルト	2～6cm程の地山礫を少し含む
溝堆積土	4	10YR3／3 暗褐色		1～3cm程の地山小礫を含む 赤色（10R4／8）の小礫を少し含む
SD34堆積土	5	10YR5／6 黄褐色	シルト	1cm程の地山小礫を少し含む
SD35堆積土	6	10YR5／6 黄褐色	シルト	1cm程の地山小礫を少し含む
SF11積土	7	10YR4／4 褐色	砂質シルト	5cm程の地山礫を比較的多く含む、しまりあり
	8	10YR4／4 褐色	シルト	1～9cm程の地山礫を多く含む、しまりあり

※ トレンチ北壁で1層と6層との間に灰白色火山灰が部分的に堆積していた

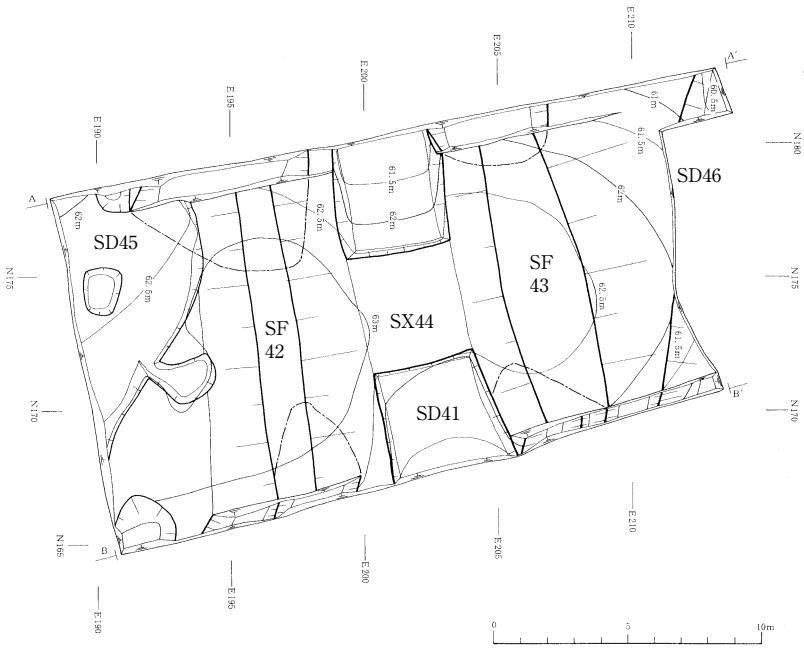
第17図　多賀城跡調査研究所第３次調査の概要



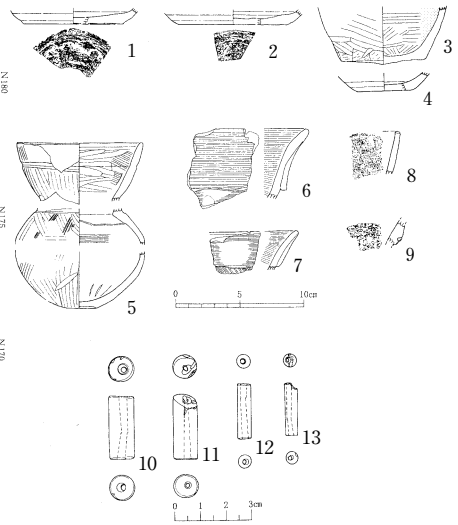


大別層	No.	土色	土性	粘性	しまり	概要
表土	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	やや有	なし	
	2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	やや有	なし	
SD51堆積土	3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや有	やや有	橙色(10YR6/8)の地山小粒含む
	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	やや有	やや有	地山小礫・小粒を少量含む
	5	灰白色(2.5Y8/2)	シルト	なし	なし	灰白色火山灰層。やや黄色味有
	6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト	有	やや有	地山小粒少量含む。崩壊土？
SD49埋積土	7	暗褐色(10YR3/4)	シルト	やや有	なし	地山小粒を少量含む
SD47堆積土	8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	なし	なし	下部に灰白色火山灰のブロック
	9	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	なし	やや有	地山礫を少量、小粒を微量含む
	10	黄褐色(10YR5/6)	シルト	やや有	なし	地山小粒を微量含む
SF52崩壊土	11	黄褐色(10YR5/6)	シルト	やや有	やや有	地山小粒を微量含む
SF52積土	12	明黄褐色(10YR7/6)	粘土質シルト	有	有	地山土を主体とする層
旧表土	13	褐色(10YR4/4)	シルト	なし	有	地山粒を少量含む
SF50積土	14	黄褐色(10YR5/6)	シルト	やや有	やや有	部分的に地山ブロックを含む
	15	明黄褐色(10YR7/6)	粘土質シルト	有	有	地山土を主体とする層
SF50積土	16	褐色(10YR4/4)	シルト	なし	有	地山粒を少量含む
SF48B積土	17	明黄褐色(10YR6/8)	シルト	なし	有	地山土を主体とする層
SF48A崩壊土	18	暗赤色(10YR3/6)	シルト	なし	なし	焼土層。地山土を微量含む
	19	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	やや有	やや有	地山土を主体とする
	20	暗赤色(10YR3/6)	シルト	なし	なし	焼土層。地山土を微量含む
	21	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	やや有	やや有	地山土を主体とする
	22	にぶい褐色(7.5YR5/4)	シルト	やや有	有	地山礫・小粒を少量含む
SF48A積土	23	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	なし	有	地山土を主体とする層
	24	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質シルト	なし	有	地山土を部分的に含む
	25～29	23層と24層が互層になっている				
	30	明黄褐色(10YR7/6)	シルト	やや有	有	地山土を主とする層
	31	にぶい褐色(7.5YR5/4)	シルト	やや有	有	地山礫・小粒を少量含む
基礎整地	32	にぶい褐色(7.5YR5/4)	砂質シルト	なし	有	炭を微量、地山小礫を多く含む
旧表土	33	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	なし	有	地山小礫を多く、礫を微量含む

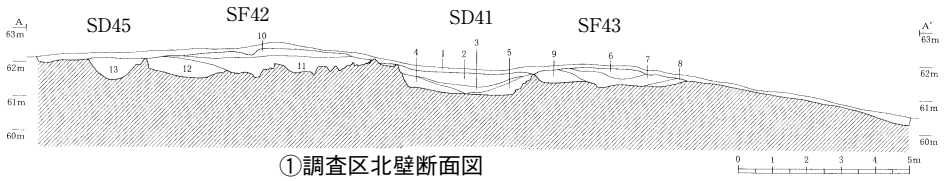
第18図　多賀城跡調査研究所第４次調査の概要（1）



外郭東辺地区調査区全体図



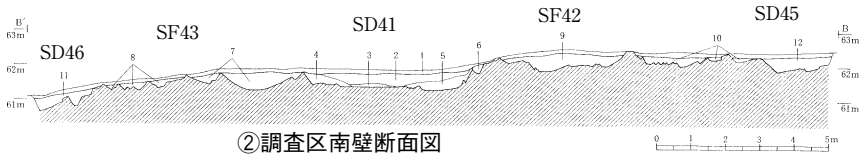
外郭東辺地区調査区出土遺物



①調査区北壁断面図

大別層	No.	土色	土性	概要
表土	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	しまりのないサラサラした層
SD41 堆積土	2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山の板状小礫を少量含む
	3	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	灰白色火山灰層
	4	明黄褐色(10YR6/8)	シルト	大きな地山板状礫を多量に含む,土塁崩壊土?
	5	黄褐色(10YR5/8)	シルト	大きな地山板状礫を多量に含む,土塁崩壊土?
SF43 積土	6	褐色(10YR4/6)	シルト	大きな地山板状礫を多量に含む
	7	黒褐色(10YR2/3)	シルト	大きな地山板状礫を少量含む

大別層	No.	土色	土性	概要
SF43 積土	8	褐色(10YR4/4)	シルト	大きな地山板状礫を多量に含む
	9	黄褐色(10YR5/6)	シルト	大きな地山板状礫を少量含む
SF42 積土	10	褐色(10YR4/6)	シルト	大きな地山板状礫を多く含む
	11	暗褐色(10YR3/3)	シルト	10に比して地山板状礫の含有少ない
	12	明黄褐色(10YR6/8)	シルト	大小の地山礫を多量に含む
土取り溝	13	黒褐色(10YR2/3)	シルト	大小の地山礫を比較的多く含む



②調査区南壁断面図

大別層	No.	土色	土性	概要
表土	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	しまりのないサラサラした層
SD41 堆積土	2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山の板状小礫を少量含む
	3	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	灰白色火山灰層
	4	黄褐色(10YR5/8)	シルト	大きな地山板状礫を多量に含む,土塁崩壊土?
	5	褐色(10YR4/6)	シルト	大小の地山板状礫を少量含む,土塁崩壊土?
SF42積土	6	黄褐色(10YR5/8)	シルト	大きな地山板状礫を積んでいる

大別層	No.	土色	土性	概要
SF43 積土	7	暗褐色(10YR4/6)	シルト	大きな地山板状礫を多量に含む
	8	黒褐色(10YR2/3)	シルト	大きな地山板状礫を比較的多く含む
SF42 積土	9	黒褐色(10YR2/2)	シルト	大小の地山板状礫を比較的多く含む
	10	黒褐色(10YR2/2)	シルト	大小の地山板状礫を比較的多く含む
	11	黒褐色(10YR2/2)	シルト	大小の地山板状礫を比較的多く含む
土取り溝	12	黒褐色(10YR2/3)	シルト	大小の地山礫を比較的多く含む。

第19図　多賀城跡調査研究所第４次調査の概要（2）

灰白色火山灰層を10C前葉の鍵層として遺構の堆積状況を見ていくと、ここでは灰白色火山灰が降下する10C前葉には、ふたつの平行する土塁はすでに崩壊するものの、SD41溝跡はまだ溝として機能していたものと考えられる。

以上の成果をまとめれば、桃生城跡の外郭北辺は西端部で１条の築地・２条の土塁と３条の溝、中央部で２時期の土塁と２条の溝、東端部で２条の土塁と溝、また、東辺北端部では２条の土塁と３条の溝というように、場所ごとに様々なあり方をなし、第４次調査の地点を外郭東辺とみていた。

（2）SX03土塁とSD02溝について

今回の調査ではSX03土塁とSD02・04・05溝を発見したが、その中で東西方向に続くSX03とSD02は、位置関係およびSD02の堆積状況から一連の区画施設と捉えられる。

ところで、多賀城跡調査研究所で確認したSD35溝跡の北側約５～６ｍ付近で、東西方向の溝状の窪みを今回の調査時に実施した踏査で確認した。この溝状の窪みは、SD35に平行するように西側へおよそ100ｍ続いており、SD02溝跡のほぼ西側延長線上にある。このことから、SD02溝はこの溝状の窪みに接続するものと考えられ、SD02溝とSX03土塁は新たな桃生城の外郭北辺区画施設とみて間違いないと思われる。すなわち、桃生城跡の外郭北東隅部における北辺区画施設は、多賀城跡調査研究所で確認していたSD34・35溝とSF11土塁だけではなく、その北側に溝と土塁からなる区画施設がさらに存在していることになる。そしてそれは、南へ曲がり東辺に続くのではなく、さらに東へと続いていたと考えられる。

（3）SD04溝、SD05溝について

SD04溝、SD05溝は、前述のSX03土塁とSD02溝のすぐ南で発見した南北方向の溝である。両溝は北端部が西へ振れており、一定の間隔をおいてほぼ平行して南へ続いている。そして東側のSD04は西側のSD05より幅が狭い。

一方、今回の調査区の南では、前述のとおり多賀城跡調査研究所が第４次発掘調査を実施しており、南北方向に続く３条の溝（SD45・41・46）と、２条の土塁（SF42・43）を検出している。３条の溝の中では最も東側のSD46が最も幅が狭い。

これらの遺構についてみると、今回の調査で発見した東側のSD04と西側のSD05の南延長線上には多賀城跡調査研究所の調査で発見されたSD46とSD41が位置しており、東側のSD04とSD46、西側のSD05とSD41は、それぞれの上幅や断面形、堆積土の状況が類似している。また、東側のSD04とSD46は、西側のSD05とSD41よりともに幅が狭いことでも共通している。以上のことからSD04溝とSD05溝は、両溝の間に積土は確認されなかったが、多賀城跡調査研究所の調査で発見されたSD46溝と西側のSD41溝にそれぞれ接続する一連の溝と考えられる。

３．桃生城跡北東隅部における外郭区画施設について

以上のような調査成果を踏まえ、桃生城跡北東隅部における外郭区画施設について検討する。

これまで桃生城跡の外郭北辺・東辺については、北辺がSF11土塁とSD34・35、東辺がSF42・43土塁とSD46・41・45と考えられていた。そして今回の調査で発見した南北方向のSD04とSD05は、これまで外郭東辺区画施設のSD46とSD41と一連の溝とみられた。

一方、東西方向のSX03土塁とSD02溝は、これまで考えていた桃生城跡の北辺のさらに北側に構築された新発見の外郭北辺区画施設と考えられるもので、本調査区よりもさらに東側へ続いている。すなわち、このSX03土塁とSD02溝の発見は、桃生城の全体の規模がこれまで考えていた範囲よりさらに東側へ拡大していた時期があることを示している。

このことは、たとえば、隣接地として平成13年度に当課で発掘調査を実施した新田東遺跡が桃生城の内部に含まれることになるなど、従来の考え方に変更を迫るものである（註１）。今回発見された遺構群は桃生城の外郭北辺と東辺の問題に単にとどまるものではなく、桃生城跡全体の規模と構造、変遷の解明に向けての端緒となる重要な成果である。

註

（註１）桃生城の記載は『続日本紀』中にある。

(1) 天平宝字２年（758）10月に造営が開始される。

(2) 天平宝字４年（760）正月には、出羽国雄勝城及び陸奥国牡鹿郡に大河を跨え、俊嶺を凌いで桃生城を完成した功績によって、陸奥国按察使兼鎮守府将軍藤原朝獦（あさかり）以下の役人が位階を授けられている。

(3) 宝亀５年（774）７月には海道蝦夷の叛乱によってその西郭を敗られ、持ちこたえることができず、殺傷者を不明と報告する。

(4) 宝亀６年（775）11月、桃生城を侵した叛賊を討治、懐柔帰服した功績によって、陸奥国按察使兼鎮守府将軍大伴駿河麻呂以下1,790余人の叙位叙勲が行われる。

文献(1)・(2)から桃生城の創建年代は明らかである。文献(3)から海道蝦夷の叛乱によって桃生城西郭が敗られ、文献(4)からその叛乱関係者が討治、懐柔帰服せられたことがわかる。この時の桃生城陥落が即座に廃絶を意味するのか、あるいは文献(4)の叙位叙勲が桃生城奪還までを意味するのか、史料は伝えていない。

Ⅳ・まとめ

①今回の調査によって、発見された遺構は溝跡３条、土塁跡１条、土壙１基、竪穴住居跡３軒である。

②竪穴住居跡3軒のうち、SI01が９C後半、SI07が９C代のものと考えられた。他の遺構は灰白色火山灰層との関係から、少なくとも10C前葉にはその機能を失っていたものと考えられた。

③今回の調査成果は、桃生城跡全体の規模と構造、変遷の解明に向けての端緒となる重要なものである。

図版１

１　桃生城跡遠景
（中央右側が今回の調査区）
（北東上空から）

２　今回の調査区
（南東から）

３　今回の調査区（北から）

1　SD02溝跡・SX03土塁跡
（東から）

2　SD02溝跡・SX03土塁跡
（南から）

3　SD02溝跡・SX03土塁跡
（東から）

図版 3

1　SX03土塁跡断面
（東から）

2　SX03土塁跡断面
（南から）

3　SX03土塁断面図
（南西から）

1　SD02溝跡（Ⅱ区）
（西から）

2　SD02溝跡・SX03土塁跡
（Ⅲ区）
（東から）

3　SD04溝跡北端部（Ⅰ区）
（南東から）

図版 5

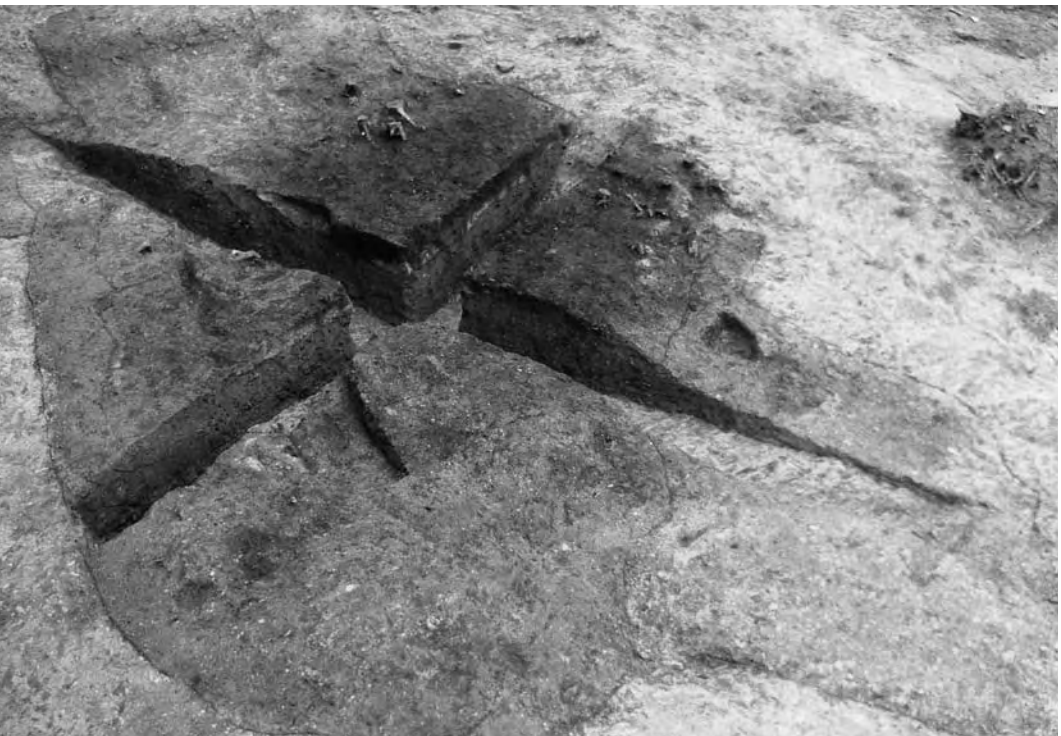
1　SD04溝跡（Ⅳ区）
（南から）

2　SD05溝跡
（Ⅰ区中央トレンチ）
（南東から）

3　SD05溝跡
（Ⅰ区南トレンチ）
（南東から）

1　SI01竪穴住居跡断面
（南から）

2　SI01竪穴住居跡（西から）



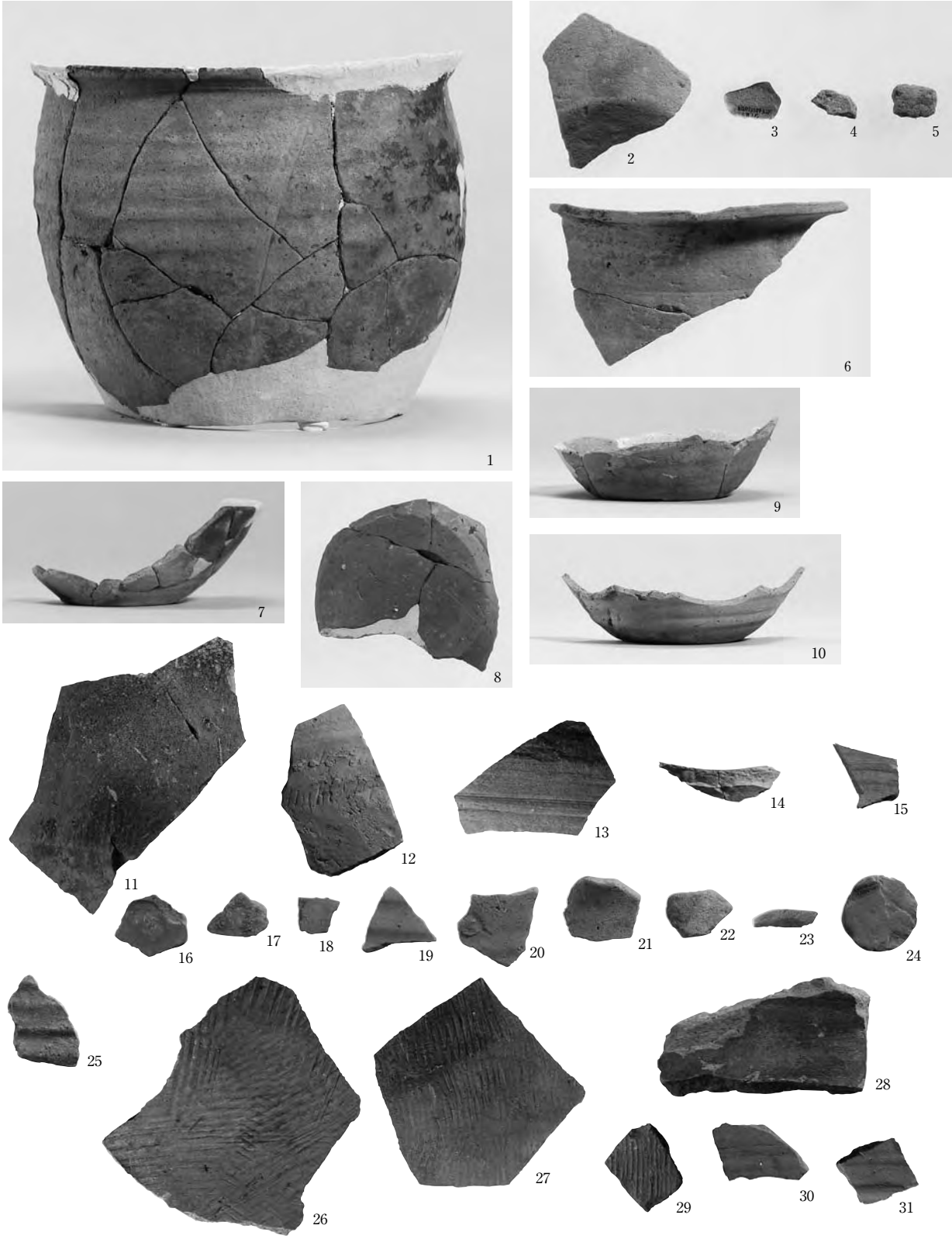
3　SI07竪穴住居跡
・SK08土壙（南東から）

図版 7

1　SI07竪穴住居跡・
SK08土壙断面（東から）

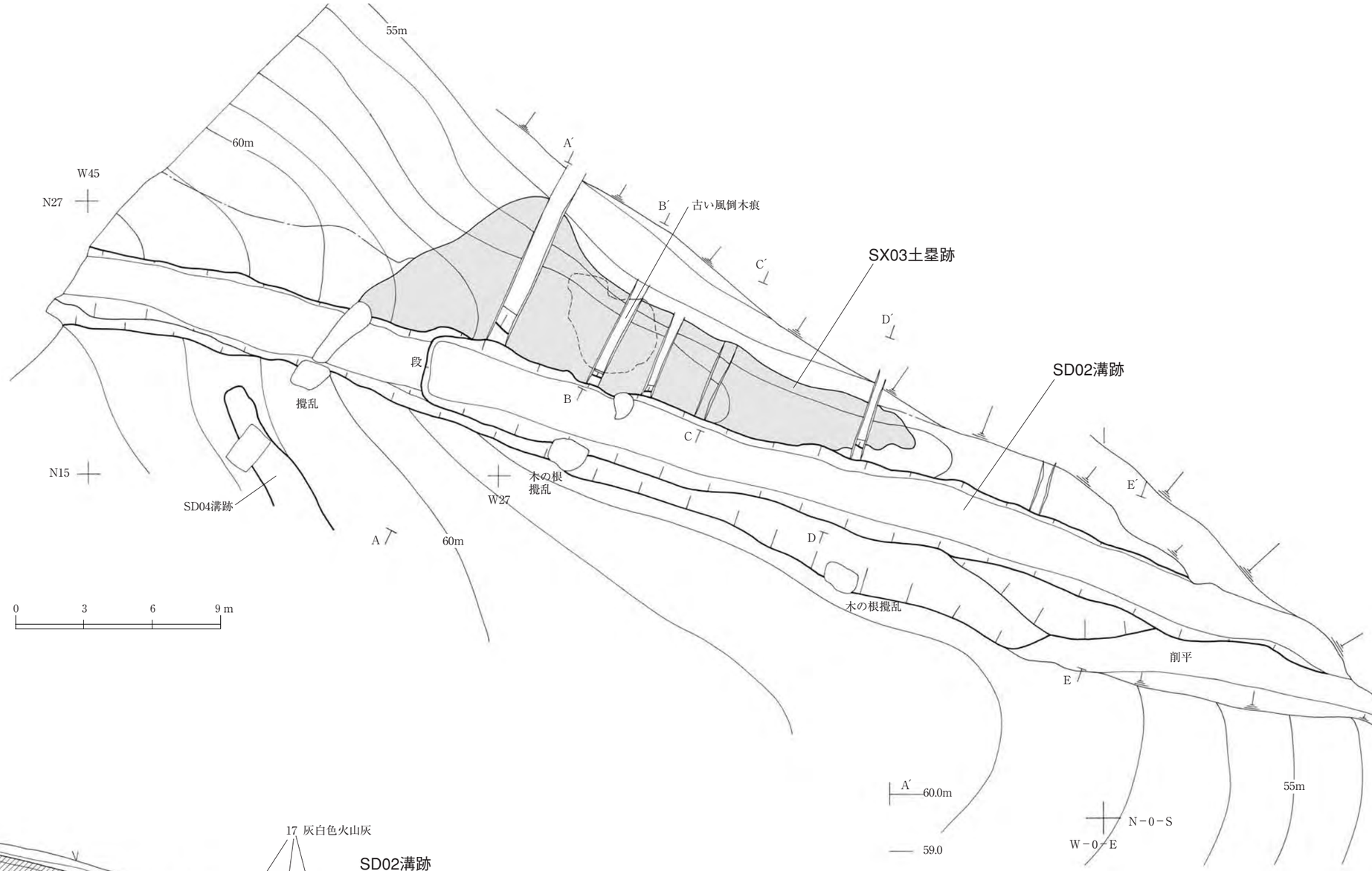
2　SI07竪穴住居跡カマド
（南から）

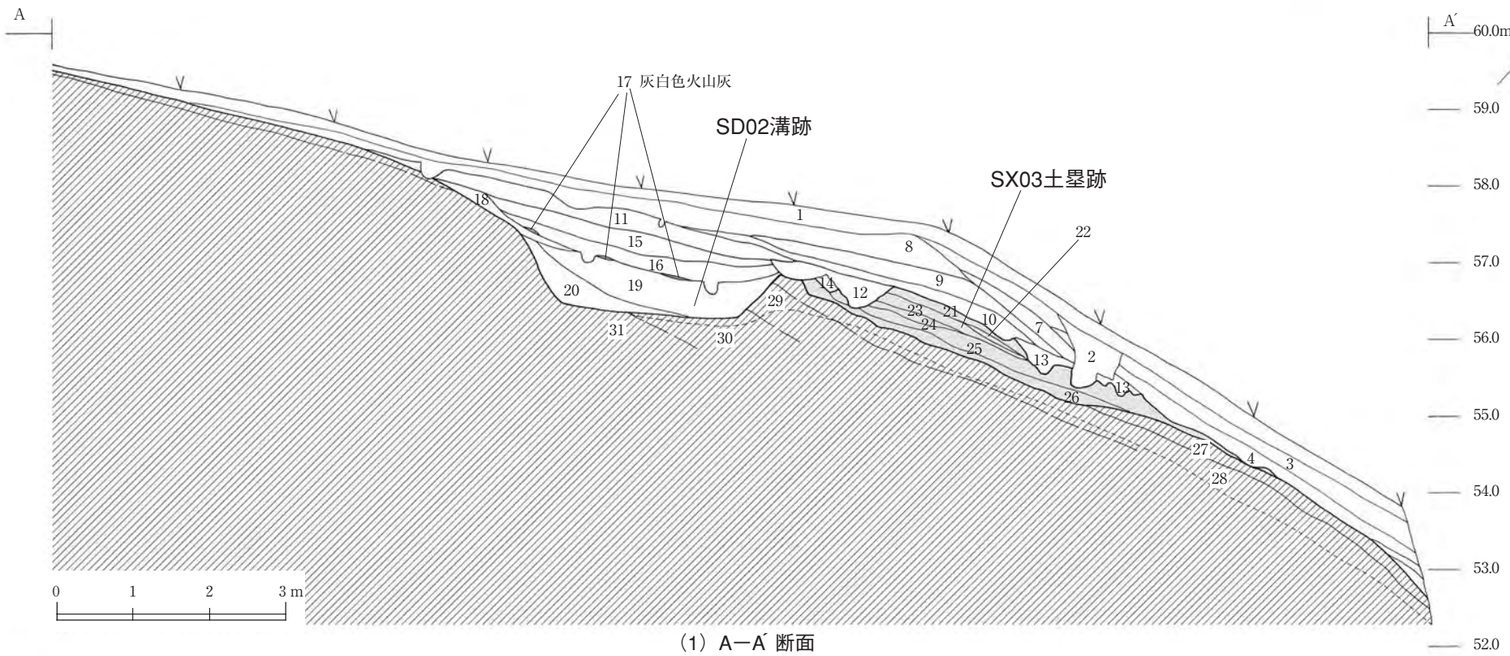
3　SI06竪穴住居跡
（南西から）



1～5：SI01竪穴住居跡出土遺物
6：SI06竪穴住居跡出土遺物
7～24：SI07竪穴住居跡出土遺物
25：SD04溝跡出土遺物
26：SD05溝跡出土遺物
27～31：SD02溝跡出土遺物

1～6・19～23・25：土師器甕
7・16～18：土師器坏
8～10：須恵器坏
11～15・26～31：須恵器甕
24：石製模造品





（1）A―A′ 断面

番号	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山小礫を若干含む。細根に富む。
2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	部分的に黒褐色土あり。木の根撹乱。しまりなし。
3	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山小礫を若干含む。ややしまりあり。
4	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山小礫を若干含む。ややしまりあり。
5	褐色（10YR4/6）	シルト	地山小礫を若干含む。地山崩落再堆積層。
6	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山小礫を若干含む。地山崩落再堆積層。
7	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山小礫を若干含む。遺物あり。
8	褐色（10YR4/4）	シルト	地山小礫をやや多く含む。
9	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山小礫をやや多く含む。
10	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山小礫を若干含む。
11	黒褐色（10YR2/2）	シルト	地山小礫をわずかに含む。
12	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山ブロックを含む。撹乱。
13	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山ブロックを含む。撹乱。
14	褐色（10YR4/4）	シルト	地山ブロックを含む。撹乱。
15	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山小礫をわずかに含む。SD02堆積土。
16	黒褐色（10YR2/2）	シルト	地山小礫をわずかに含む。SD02堆積土。
17	にぶい黄橙色（10YR6/3）	シルト	灰白色火山灰層。SD02堆積土。
18	にぶい黄褐色（10YR 4 /3）	シルト	地山礫・地山ブロックを含む。SD02堆積土。
19	褐色（10YR4/4）	シルト	地山礫・炭化物わずかに含む。SD02堆積土。
20	黄褐色（10YR5/6）	シルト	地山礫・地山ブロックに富む。SD02堆積土。
21	褐色（10YR4/6）	シルト	地山礫・地山ブロックを含む。炭化物をわずかに含む。SX03積土。
22	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山礫・地山ブロックを含む。炭化物をわずかに含む。SX03積土。
23	褐色（10YR4/6）	シルト	地山礫・地山ブロックを含む。炭化物をわずかに含む。SX03積土。
24	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山礫・地山ブロックを含む。炭化物をわずかに含む。SX03積土。
25	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山小礫・地山ブロックを含む。炭化物を含む。SX03積土。
26	褐色（10YR4/6）	シルト	地山小礫・地山ブロックを含む。炭化物を含む。SX03積土。
27	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山岩盤起源風化亜角礫（径5～15cm）（明黄褐）を含む。炭化物なし。地山。
28	褐色（10YR4/4）	砂質シルト	地山岩盤起源風化亜角礫（径5～15cm）（明黄褐）を含む。炭化物なし。地山。
29	黄褐色（10YR5/6）	砂質シルト	地山岩盤起源風化亜角礫（径5～15cm）（明黄褐）を含む。炭化物なし。地山。
30	明黄褐（10YR6/8）	（軟質の岩盤）	（27）・（28）・（29）層中の亜角礫の供給元層。均質な軟質岩盤。
31	にぶい黄褐色（10YR6/4）	岩盤	地山岩盤。

第９図　SD02溝跡・SX03土塁跡（1）